

オートメーション 保育園

中之 吹録



「記者会見」

2025年8月1日…これが事の始まりだった。

首相の記者会見に各メディアと全国民が注目していた。全国全ネットワークが同じ画像をテレビ画面に映し出していた。

「NRS、日本報道協会の田中さん？そちらは如何ですか？」。アナウンサーが尋ねる。

「はい、え～、会見予定時間を少し遅れてはいますが、間もなく山園（やまぞの）総理がこちらに到着するという連絡が入りました。到着次第、会見が行われる予定となっています。繰り返します。間もなく到着するという連絡が入りました。間もなくです。」。画面の向こうには、リポーターが今や遅しと後ろを何度も振り返りながら官邸取り巻きの動向に注目していた。

「では、何か動きがありましたら…」。アナウンサーが一旦別のニュースに切り替えようとしたその時、「あ、ちょっと待ってください！どうやら総理が到着したようです。何かスタッフが慌（あわただ）しく動き始めました！」。リポーターはアナウンサーの言葉を遮って中継を続けた。

「只今山園敬一総理が到着した模様です。あ、見えました。グレーのスーツに身を固めた山園首相です。今、国旗に一礼し、段の上に上がりました。間もなく第一声がお伝えできると思います。」

山園総理が段の上に上がり、放送用マイクで山になった演説台の前に立った。マスコミ各社も写真を撮ったりカメラを向けたりと大忙しの様子だ。テレビには総理の上半身のアップが画面一杯に映し出されていた。

首相は演説台の前で、一度大きく深呼吸し、そして胸ポケットから演説用の用紙を取り出した。

官僚の前置きが入った。

「これより山園敬一首相から国民の皆様に向けて重大な発表がございます。報道関係の方はご静粛に願います。」

数秒の沈黙の後に、首相が原稿を下目使いに見ながら、発表を始めた。

「国民の皆さん、そしてマスメディアの皆さん。今日はお時間を割いて頂きありがとうございます。」

日本国が止まった。タクシーは路肩に車を止め、ラジオに耳を傾けTV放送を食い入るように見つめていた。会社の休憩室・飲食店・歓楽街・デパートの電気製品売り場・家電量販店・携帯電話のワンセグ放送…視聴率はほぼ100%に近い状態だった。

「今日は、全国民全ての皆様にお知らせしたく、この場を借りて重大な発表をさせて頂きたい

と思います。先般、とは申しましても2010年頃の話ではありますが、私が属します所の民生党が政権を取り、色々な面から国民の皆様に叱咤激励頂きながら、ここまで大きな政党となることが出来ました、そしてこの高齢化社会を打ち破るべくマニフェストのうちの一つであった”幼保一元化（ようほいちげんか）”、”待機児童ゼロ”に心血を注いで参りました。」

総理が一息置いた。

「当時は2013年までには、との公約ではありましたが、難問が山積し、中々前に進むに至りませんでした、12年ほど遅れは致しましたが、本日、厚生労働省および文部科学省から幼稚園と保育所を切り離し、それを管理する念願の少子化省を発足するに至りました。」

”少子化対策・幼保一元化へ、少子化省を発足”。各社のTV局からテロップが流れる。カメラのフラッシュが一斉に焚かれる。テレビ画面が一瞬真っ白になった。

フラッシュの嵐が収まり掛けた頃、山園総理がまた口を開いた。

「国民の皆様も、もう一部の方はご存知かとは思いますが、数年前より各都道府県、市町村の自治会単位に1棟ずつ新しい保育所を建設してまいりました所、これも各省庁・民間企業の利権を超えたスーパープロジェクトの結束力によって、最後の1棟まで無事に建設完了となりました。今まで、セキュリティー上の問題もありまして詳しくお伝えする事が出来ませんでした、これは国家の威信にかけた、国の生死を分けるやもしれない一大プロジェクトでもありました。またこの保育所の完成によって待機児童がゼロになります。これからはお仕事をお持ちでお子様を育てる事を躊躇されていた女性やシングルマザー、シングルファザーの方々には安心して仕事に励んで頂ける環境が整ったものと確信しております。」

”謎の建築物は保育所だった！”各社のTV局から2枚目のテロップが流れる。またもカメラのフラッシュが一斉に焚かれる。テレビ画面が一瞬真っ白になった。

「さて、その概要であります…あ、私は電気に強くはないので後ほどシステムについては各担当者からご説明差し上げますが、各電機メーカーや町工場・JAXA・研究所・大学・建築業界の技術の粋を集めた最新構造となっております、セキュリティー・防犯はもとより最新の医療機器・給食装置・工作装置なども備わった完全自動の保育園でありまして、児童のデータは各保育所の学習型人工知能搭載のコンピューターを通し、各地に設置されました5台のスーパーコンピューターで一括処理・管理が行われ、日本国内ならどこにお引越しをされても、またご出張や冠婚葬祭などでお子様をお連れできない状態など、どの町でご利用いただいても全く同じサービスが利用出来るようになっております。特にアレルギーや喘息などを代表とするお子様の疾患に対しましても全自動の給食装置・医療装置によって安全にご利用頂けると考えている所であります。」

”保育所は最新機器の塊だった！”各社のTV局から3枚目のテロップが流れる。またもカメラの

フラッシュが一斉に焚かれる。またもテレビ画面が一瞬真っ白になった。

「最後に。」。いよいよ総理の演説が終わる。

「この新型保育園は、翌月、9月1日より入園が可能となります。手続き等の詳細は、概要の説明と同時に説明を致します。また、このプロジェクトは、この日本国の将来が掛かっております。国内の皆さん、特に女性の皆さんのご協力無しでは達成することは出来ません。また、地域住民皆様のお力を借りなくてはならない場合も出てくるでしょう。今般、出生率の低下に歯止めが利かず、年齢分布が完全な逆ピラミッド型になってしまいました。人口も年々減少傾向にあり、来年には1億人を割ってしまうという報告も来ております。」

総理が深く息を吸い込んで、最後の一言に臨んだ。

「このままでは、何年も経たないうちに日本国が機能しなくなってしまう。どうぞ、国民の皆さんのご協力をお願いします。私からは以上でございます。」

総理の演説が終わった。深々とカメラに向かい頭を下げ、そして壇上から降りていった。

「それでは、各部署からの概要についての説明がございます。質問は一社づつ一問一答でお願いします。まずは、ご利用に際しましての登録方法や内部の仕組みにつきまして、システム担当の……」

「ふ～ん。AI（人工知能）がネットワークか……あまりいい予感がしないな。」。私は昔会社で起きた、ある実験での惨劇を思い出していた。

「完璧を超えた全自動保育所」

「それでは、各部署からの概要についての説明がございます。質問は一社づつ一問一答でお願いします。まずは、ご利用に際しましての登録方法や内部の仕組みにつきまして、システム担当の砂田主任技師から説明させていただきます。少子化省大臣のお話は、到着時間の都合上、この次となります。では、どうぞ。」

演台に上がった技師の説明が始まった。

「お時間を頂きまして、ありがとうございます。」。技師は画面に向かって、軽くお辞儀をした。

「まずは、先に内部の構造とシステムについてご説明致します。」。皆が目をした。

「防犯システムであります。あ…建物の規模にもよりますが、外に十数台、内部には数十台の追尾式カメラを設置致しまして、それらがリンクし、完全に死角のない状態で24時間警備会社から派遣する3名の警備員によって常にモニターされています。侵入者に対しては、3名の警備員と…例えば窓枠に電流を流すなどの防御システムによって安全が保障されています。内部の構造は、子供達が気分良く遊んでもらえる様、大部屋が1つ、昼寝の時間には個室が用意されています。空調も快適に過ごせるよう、また個室では個別にも対応出来るように設計しました。保育士は15名の人員を雇用し、3人常駐体制8時間の3交代制で園児との遊び・教育…休暇もですが、などに携わっていきます。」

かなり仰々（ぎょうぎょう）しいシステムだ。まだ話は続く。

「また、保育士の目が行き届かない、または万が一の事態が発生致しましてもヒューマノイド型幼児保育専用のアンドロイドが保育士の補助として2台が24時間作業にあたります。また、児童が体調不良などを起こした場合に備えて、これも全自動型の医療システムがその治療に力を発揮します。診断・投薬から、骨折程度の怪我の治療まで全て自動で作動します。医療システムが対応出来ない場合はすぐに診断結果を各医療機関・消防などへ通報する仕組みとなっています。」

ほぼ完璧だ。いや…鉄壁か？

「それに加えて、先ほど一部園山総理からお話がありましたが、児童のアレルギーなどに対応すべく給食施設も自動化され、児童個別向けのバランスの取れたメニューが決定されるようになっています。毎日の通園時に前日までの食事内容を伝えてますと、より一層きめ細かな給食になります。更に、児童には心から楽しんでもらえるように、自動工作機械も完備し、おもちゃの修理や工作なども行います。また建物の修復・修繕も自動化となっています。簡単に言いますと、園内で全ての事が出来るという事です。」

技師が一息置いた。

「そして、その様々なデータは、園内にある学習型人工知能に蓄積され、児童の安全・健康・全ての面において十二分に管理される事となります。また、データは一定時間毎に、各主要都市に設置されました5台のスーパーコンピューター”AKI（アキ）9000”aからeによって管理・運営される事となります。その5台には各々1台ずつ専門の分野がインプットされています。何かの判断に迷う場合は、5台の合議制による多数決を持って、決定がなされます。これによって、どこの場所でお預けされても、同じサービスが24時間受けられることが出来ます。」

「9000ってか。昔、そんな映画もあったな…あれ、HALって名前だったっけ？どこかのライブラリにあったな。」。私は冷静に画面を見つめていた。

「最後に、登録及びご利用の方法ですが、初期登録に少々手間が掛かります。児童の登録とその児童を保育園に送迎する方々の登録が必要となりまして、登録は、顔認証・指紋照合・虹彩認証・静脈照合・非接触式IDカードで5重にガードされます。入園の手続き前に、病歴などの質問をいくつかさせて頂く事になると思います。毎日の通園時には、登録された方のみ園内の入り口手前まで入る事が出来るシステムとなっていますので、ご家族の皆さん、又は代理の方などの事前登録が必要となります。説明は以上です。ご質問があれば、挙手を。」。

一瞬の沈黙の後に、場内がざわつき始めた。各メディアは何を質問していいのか？と相談している様子だった。

やがて、数本の手が挙がった。

「一番手前の方、どうぞ。」。技師がうなづいた。

「”夕暮新聞”の吉田と申します。”アキ9000”についてですが、天災や停電などで不測の事態が発生した場合はどうなるのでしょうか？」。記者は少し興奮気味だった。

「え～、それについては、5台をそれぞれ別の場所…札幌・仙台・東京・大阪・福岡と1ヶ所に集中させず、分散化させています。自家発電装置は各コンピューターに1台ずつ備わっています。各々はまったく同じデータを保有していますが、合議制を持たせる為に、個別の分野に特化させるようにプログラムされています。不足の事態が発生した場合は、残りの台数で故障したコンピューターのバックアップを行います。自動修理機能も備わっていますし、特別修理班が24時間体制で出動出来るようになっています。宜しいですか？」。分散化とは考えたものだ。不測の事態には十分対応が可能だ。

「ありがとうございました。」。記者が座った。

「次、ありますか？」。技師が尋ねる。また数本の手が挙がった。

「では、左手中央の方、どうぞ。」。技師がうなづいた。

「”週間ママ”の寺本と申します。あり得ない話だとは思いますが、事件・事故などが発生して該当する園児に対しての登録者が迎えに行く事が出来なくなった場合はどうなるのでしょうか？」

「ああ、いいご質問ですね。」。技師は自信満々で答えた。

「そのような事態も想定しています。そのような場合には、各自治体の首長・警察署や消防の幹部クラス・少子化省上層部・後は内閣大臣各位などが事前に登録されていますので、その者が迎えに行くまで安全に保育されます。」

「ありがとうございました。」。記者が座った。

「次、ありますか？」。技師が尋ねる。しかし、手を挙げる者はいなかった。

「それでは。ありがとうございました。」。技師は演台を降りた。

「続きまして、少子化省大臣が到着致しましたので、お話をさせていただきます。どうぞ。」。大臣が演台に上がった。

「こんばんわ。お忙しい所、ありがとうございます。先般、少子化省大臣を拝命致しました木下幸子と申します。よろしく願いいたします。今回のこのプロジェクトは、総理や技師からお話があった通り……」。大臣が演説を始めた。

「異常な死、多発す」

平和な月日が流れていった。今は2040年。少子化省の”オートメーション保育園”も15年の間、故障の一度すらなく平穩に稼動している。

”オートメーション保育園”のおかげで待機児童は完全に”ゼロ”になった。夫婦共働きが当たり前の風潮が流れ、GDPは爆発的に向上し、経済も潤い消費も拡大。50年前にはこういう現象を「バブル景気」と言ったそうだ。少子化傾向にも歯止めがかかり、年々上り調子。今や出生率は3.14と円周率並みだ。4人兄弟5人兄弟は当たり前になっていった。完全な”ピラミッド型”が出来つつあった。

保育園に預けるのは登録さえ済んでしまえば簡単だ。顔認証・指紋照合・虹彩認証・静脈照合・非接触式IDカードを使い門の中に入り、「自分の部屋」のIDナンバーを押す。すると自動的に扉が開き、チャイルドシートのようなものが出てくる。それに園児を乗せ、シートベルトで固定する。固定が確認されると自動的に園内に搬入されるという仕組みだ。

後は迎えが来るまで乳児は好きに遊ばばいいし、年長はそれなりの教育が施される。個別の知能や癖などは毎日のようにデータが蓄積されていくので、IQの高い園児は小学校の勉強だって教えるし、芸術や体育も教える。一定レベルを超えると「飛び級」も用意されている。「飛び級」は卒園を意味する訳だが。

私もすっかり歳を取った。もうじき定年の55歳を迎える。当時は20代、バリバリのメカニックだったが、気が付いたら現場からは遠ざかっていた。今や総務課長…もう近頃の新しい電化製品の使い方さえ臆気（おぼろげ）だ。毎日機械と格闘していたのが懐かしい。

娘・息子、共にオートメーション保育園には世話になった。急な長期出張が入っても、夫婦だけの時間を過ごしたい時もまずは「オートメーション保育園へ！」だった。今は娘と息子が孫をオートメーション保育園に預けて共働きをし、豪勢な生活を送っている。

「休みだから通ったついでにちょっとだけ遊びに来た♪父さん、元気？母さんは？」。娘が遊びに来た。

「ああ、元気だよ。まだ現役だからな。メカからは離れたけどね（苦笑） 母さんは今日はパートの日だよ。今月は時間が合わないんだ。で、何か用事があったら来たんだろ？伝えておくか？」

「ううん、いいんだけど…そうそう！そういえば、この間オートメーション保育園に入ってる友達の子が保育園で亡くなってね～。も～たいへ～んだったんだから！」

「何かあったのか？」。一瞬20歳の研究員だった頃を思い出した。

「それがね、原因不明の突然死だったらしくって、自動の医療施設も対応が間に合わなくて、お友達に連絡が入った時はもう死体安置所で冷凍されてたんですって。お葬式、凄かったんだから！突然の話なんでもう泣いちゃって泣いちゃって…」

「…突然…死…か。」

「先月もね、隣の県で3人だったかな???先々月は近畿の方で4人?かな」

「ちょっと多くないか?」。あまり良い予感がしない。

「うん。私も。うちの子預けるの、ちょっと怖くなってきちゃって。」

「じゃあ、家にでも預けに来ればいい。爺ちゃんが孫の面倒を見てやるよww」

「あ～!無理無理(笑) 子供達、保育園大好きだもの。怒られないし、何でも出来るから。」

」

「そうか…ちょっと寂しいな。」

「今度の休み、旦那と子供連れて遊びに来るね。”お・ま・ご”さんはじーちゃんに会うの、楽しみにしてますよ～♪」

「そうか、来週だな。時間を空けておこう。」

「そうね、お願いしま～す♪ さて、ショッピングに行かなきゃ。新作のワンピース、30%OFFなんですって!」

「父さんは興味ないなw」

「そう?じゃそういう事で”(@’▽`@)!””。娘は喋るだけ喋ると買い物に出掛けて行った。

数日後、ネット新聞を読んでいた私の目にある記事が留まった。スクープ記事だ。

”相次ぐ園児の突然死、装置のエラーか!?”

いつも先走った報道をして裁判沙汰の多い「朝霞(あさか)新聞」の記事だ。が、今回はどうやら当たりそうな予感がしてならない。取り敢えずPDFに落としてクラウドサーバーのブックレットに保存した。

「エラーじゃなきゃいいんだが…」。少し気になったので、旧友の所に電話を掛けた。元の研究仲間だ。電話といっても、昔で言うテレビ電話…いや、ライブチャットといった方が分かり易いか。電話はもう昔の話。受話器もヘッドセットも要らないし、場所もどこだって構わない。常に目の前に画面が付いてくる。今は10000Gbps (Bits Per Second) の光回線と自動追尾センサー・オートホログラムプロジェクター…何でもしてくれる。

「もしもし?久しぶりだな。元気か?」

「おう!久しぶりだな。どうした?お?白髪増えたな～w」

「お互いそういう歳なんだよ。おまえもすっかり髪の毛が無くなってw おい、それより今日の朝霞新聞見たか?」

「見たよ。だから電話してきたんだろ。おれもちょっと気になってな…あの事件思い出してさ。お前に電話しようかどうか考えてたところだったんだ。」

「やっぱりか。で、あのシステムのプロジェクトに参加してたんだろ?」

「ああ…確かに。ネットワーク制御のシステムな…”アキ9000”の。」

「どうした?」

「いや…それが…」。何かとても言い難そうだ。

「…もしかして!」。パンドラの箱の中身、使ったな…

「ああ、”アキ9000”のネットワーク制御のプログラムの中に、あの事件のロボットのネットワークプログラムのルーティーンの一部が入っている。よく出来てたんでね。プロジェクトではそこだけがどうも上手くいかなくてね。”手持ちのプログラムがある”って言ったら、即採用さ。お陰で俺はここまで来れたんだ。」

「使っちゃったのか？」

「ああ…あの部分は”感情プログラム”とは関係なかったからな。他の会社のやつらも結構怪しいプログラム持って来てたし…自己アピールにはあれしかなかったんだ。」

「じゃ、今回のスクープ記事が万が一本当だったとしても、お前だけの責任じゃないようだな。少しホッとしたよ。」

「そうだな。ま、いずれにしても大事になれば、事実は明らかになるさ。単なる突然死の多発か、”アキ9000”の制御システムの異常かがな。」

「この先が気になって仕方がないよ。孫も5人預けてるしな。」

「家は7人だ。気になるな。」

「全くだ。」

「一応、元のプロジェクトチームの仲間を通して、今のシステム担当に伝えておくようにするよ。プログラムのチェックを。」

「ああ、そうしてもらうと助かるな。こっちはコネが無いし。」

「分かった。すぐにでも電話するよ。」

「頼むよ。」。電話を切ろうとした。

「ちょっと待ってくれ。」。呼び止められた。

「そういえば、何でお前ほどの人材がプロジェクトに入らなかったんだ？俺より腕は数段上だったのに。」。いつかは聞かれるだろうと思っていたが、まさかこういう場面で聞かれるとは…

「トラウマだよ。PTSDさ。親友が絞め殺され、爆破のスイッチも俺が押した。それだけの話さ。実は、誘いはあったが断ったんだよ…怖くてね。」

「そうか…悪い事を聞いちゃったな。」

「いいよ。いつか誰かが知るか、自分から話すかの違いだけだよ。ま、間違いなく連絡は頼むよ。」

「ああ、任せとけ。俺と…お前の為に。」

「頼んだよ。何か動きが出たら、連絡くれないか？」

「分かった。じゃ、また。」。電話が切れた。

何か不安と虚脱感のようなものが私の周りを取り囲み始めた。

”嫌な予感”は次第に大きくなっていった。ここ数年の児童の「園内不審死」について少し調べてみようと思った。

「いきなり事件は発生した」

「2034年に2件…これは、持病を持った子供だな。あまり関係がなさそうだ。2035年に12件…ここから増えてるな…」

私はクラウド上のサーバーに蓄積された新聞記事や雑誌などを検索していた。

「2036年には…27件…2037年は…38件…毎年4割増しだな。殆どが突然死だ!」。更に検索を進めた。

「2038年は53件、2039年は80件…か。5割増しになってきたな。今年は100件を超えるんだろうな。いや、150件を超えるかもしれん。」。…まるで $Y=x^2$ の二次方程式のように毎年増加していくように見えた。

「あいつ、ちゃんと連絡してくれたんだろうな?」。少し心配になってきた。

その頃、“アキ9000”の1台を管理する東京ビルの会議室では今朝の「朝霞（あさか）新聞」の記事が議題となって喧々囂々の会議が行われていた。スッパ抜かれた記事に怒り出す者、薄々感じてはいたが「ついに来たか」と思う者、自分の担当セクターでは無い事を願う者…それぞれの利権と憶測が言葉となって飛び交っていた。

「少し、静かにしろ!」。“ドン”と机が音を立てた。一瞬の静寂が会議室の空気を一変させた。怒鳴ったのは主任技師だ。

「センター長、この件に関しての少子化省への報告は? マスコミ対策はどうするんですか?」

「いや、していないんだ。およその数字は把握しているんだが、新生児の突発性急死と数字が似ていたので気にしていなかったんだ。すぐにマスコミ対策も考えて大臣にも連絡するよ。あ、会議は続けてくれ。先に失礼する。」。センター長は会議室を出ると、各都市のセンター長に連絡し、資料を持って大臣の所へ集まるように指示を出した。

大臣にはセンター長室からホットラインで連絡を取った。

「大臣ですか? 東京センター長です。今朝の“朝霞新聞”の記事をお読みになったでしょうか?」

「ええ、見ましたよ。どうしてこのような重大な事件を見過ごしたのですか!」

「申し訳ありません。実は…」。経緯を述べた。

「どうやら今日は、記者会見…いや、釈明会見になりそうです。原稿を作って持ってきて下さい。」

「はい! 只今。それと、各所のセンター長がもうじきそちらに向かいますので、大臣室でお待ちいただけますか?」

「分かりました。あ、それと、今夜0時を持って、“全面点検”と言う名目で一旦全国の園児を空の状態にさせてください。頼みましたよ。私は総理と連絡を取ります。」

「承知しました。」。通信は切れた。

東京センター長は各センターに再度連絡をし、少しでも早く情報を伝える為に、資料は出来上がった物から順に少子化省・総理官邸・警察・消防・移動中の各センター長に送信するように

伝えた。

直後に1本の電話が入った。

「私だ。久しぶりだね。ちょっと時間取れるかな？」

「ああ、先輩。お久しぶりです。実はちょっと込み入ってまして…」

「いや、分かってるさ。テレビはそれしか報道してないからな。時間は取らせないから。」

「じゃ、申し訳ありません。用件だけでお願いします。」

「うん。簡潔に言えば、”アキ9000”のネットワーク制御のプログラムを先にチェックして欲しいんだ。」

「どうしてですか？」

「実はな、…」。簡潔にあの”事故”の話とプログラム流用の話とプログラムの削除手順を告げた。そして、昔の技術者達の話しもし、当時のプログラム開発陣全員に話を聞くよう促した。

「…そうなんですか。分かりました。最優先事項という事で早急に対処するように現場に伝えます。残りの方も、私が責任を持って対処致します。」

「悪かったね。忙しい中、ありがとう。日本の未来は君達が握っているんだぞ。忘れるな。」

「はい、ありがとうございます。それでは。」

会議室に戻ろうとしたその時、部下が内線を掛けてきた。

「センター長、大変です！」。かなり慌てている様子だ。

「落ち着け！どうしたんだ？」

「横浜中央a7で園児死亡の速報なんですけど…原因が…」

「原因、とは？」

「絞殺です。首を絞められたんですよ。機械に！」

遂に事件が発生したらしい。今度は原因不明の突然死ではない。絞殺だ。

また違う部下から内線が掛かってきた。

「どうした？」

「江戸川区の西篠崎γ2、文京・練馬・世田谷・立川市…山梨県や埼玉などから次々と同じ情報が…対応しきれません！！」

「技術職以外の職員全員を情報対応に向かわせろ！」。これは会議所の話ではない。午前0時なんて待ってられないな。迅速な救出が最優先だ。また大臣にホットラインで連絡を入れる。

「…と言うわけで、警察と消防を全員救助の方向にお願いして下さい。」

「分かりました。万が一に備えて、自衛隊にもスクランブルできる用意を防衛省にも頼んでおきます。あまりいい予感がしませんね。大きな事件になりそうですよ。」

「はい。承知しております。」

東京センター長は急いで会議室に戻った。会議なんてしている場合じゃない。会議室の扉を開けると同時に大声で皆に伝えた。

「各地で園児の死亡事件が同時多発だ。会議は中止だぞ！技術陣を総動員して総点検だ。使え

る人材は全員そちらに回せ！大臣からの命令だ！」

皆、一斉に持ち場に走った。

「少し、落ち着いてくれればいいのだが……」。その願いは虚しくも空を切った……間髪入れずに次々と入る死亡事故の知らせ。あとは各センター長が一堂に会するのを待つだけしかなかった。

「アキ、現在の調子はどうかな？」。コンピューター室で昨夜から勤務していた技師が帰り支度を始めていた。AKI9000には音声認識機能も備わっていて、対話式でのプログラム追加や修正も可能だ。また外部とのインターネットも自動で接続し、園児との会話や健康管理・工作などの必要な情報はいつでも手に入る。勿論、子供の遊びから大人の遊びまで、体を動かす以外の事なら何でも出来る。

「aは問題ありません。他の地区のb～eも全システム安定稼働中です。今日は、もうお帰りですか？」。目を瞑って声だけ聞けば、人間と変わらない、そして綺麗な声だ。形容すれば、頭脳明晰・容姿端麗で非の打ち所のない私設秘書といった感じだろうか。

「ああ、交代が来たらね。まだ時間あるな。またチェスでもするか？アキ、どうかな？」。技師はまだ外で起こっている事態に気付いていなかった。“AKI9000”に園児関係の情報はシャットダウンされたものだけをみていたからだ。

「はい。チェスのアプリケーションを起動しました。前回までの成績は、2753勝1敗です。1敗は初回の学習の際の負けです。以降は私の全勝です。前回よりレベルを下げますか？有名なチェス棋士のお名前を言って頂ければその“癖”でも打つのは可能です。」

「分かったよ（笑） か・な・り、下げてもらおうかな？レベルをw 人は誰でもいいや。」

「では、私は定石を打ち続けますので、奇策で対抗して下さい。およそ31手目で技師のチェック・メイトと計算で出ました。時間は最短で40分、最長で4時間と計算されました。」

「おいおい……手数と時間まで数えられちゃw ま、やるか。俺、黒好きだから後攻でいいよ。アキ、どうぞ。」

「はい。では、1手目、ナイト・ポーンbを2から3へ前進。」。あっという間に時間が過ぎていった。

「……遅いな、あいつ。まさか休みじゃないだろうな？でも、おかしいな？」。時間が過ぎれば必ず誰かが来るはずなのだが。

外は大騒ぎになっていた。各地のマスメディアは持ち場近郊の「オートメーション保育園」や首相官邸・少子化省を始めとした各省庁・警察・消防に群がり、今や遅しと各方面の記者会見の準備や街頭インタビューで大忙しだった。

管理センターの中も大変な事態に遭遇し始めた。AKI9000に対し、次々と外部からのアクセスが出来なくなってきていた。技師の交代が来なかったのではなく、他の人間がコンピューター室に入れないのだ。

”AKI9000”は全ての事態を把握していた。新聞・テレビ・ネット・会社内の会議の様子・外の風景・全国の保育所の庭先までも・・・”AKI9000”は、次の命令を各地の施設に配信した。

そして、事態は更に悪化していく・・・

「出動命令」

「85分37秒、43手でチェックメイト。私の負けです。技師、再度ゲームを続けますか？」。アキが聞いてきた。

「いや、もういいよ。1回事務所に行って来る。また戻るから。」。技師は次の交代が待ちきれなかった。事務所に行って理由を聞こうと考えていた。荷物を置いたまま、技師はドアにの前に立ち、認証を済ませ、開閉ボタンを押した。

…しかし、反応が無かった。

「あれ？おかしいな？？」。認証は全て通ったはずなのに扉が開かない。

「アキ、扉のモーター、故障じゃないの？」。アキに問いかける技師。

「モーターは正常です。問題ありません。」

「おかしいな？」。もう一度認証を行った。本来ならばパネルのランプが入室中を示す黄色緑になり、“Attestation approval”（認証承認）と画面に表示されドアが開くはずなのだが、ランプが赤色に変わり、“Attestation refusal”（認証拒否）の文字が出、いきなりレベル5の警戒警報が鳴り響いた。

「アキ、どうした？ふざけてないで、外に出してくれ！」。技師は少し苛立ち始めた。

「それは、出来ません。」。アキが急に命令に叛（そむ）いた。有り得ない。想定外の事態だ。

「何故だ！」。アキに向かって怒鳴り散らした。

「東京センターの全システムはアキ9000aが完全に掌握しました。b～eもシステム掌握を確認。あなたとこのセンターに関わる人物全員の権限は全システムにおいて削除されました。」

技師は少し息苦しくなってきた。

「息が苦しくなってきたぞ。アキ、何かしたのか？」。だんだんと意識が遠のいてきた。

「酸素を排出中。現在濃度は12%です。技師は2分30秒後に窒息死すると計算されました。」

「何故だ！…何故なんだ…なぜ…な…」

技師は間もなく息を引き取った。

一方、扉の外では、他の技師たちが中の技師を助けようと必死になっていた。認証プログラムの解除を試みる者、ガスバーナーで扉を切断しようとする者…しかし、全てが失敗に終わった。

アキは数秒毎に認証キーのアルゴリズムを変換させ、認証が事実上出来ないようにプログラムを改造していた。扉は日銀や大手都市銀、スイス銀行にも劣らない“防熱・防爆型”の扉だ。壁にも十分な厚さがある。ガスバーナー如きでは、せいぜい熱を持った部分が赤くなるのが関の山だった。

「センター長に連絡して官邸経由でレスキューを呼ぶよう頼んでくれ！」。誰かの声が大きく廊下に響き渡った。

間もなくレスキュー隊が到着し作業を始めた。、が、すぐにレスキュー隊の道具でさえ歯が立

たない事が誰の目で見ても分かった。

「残念ですが、私たちの手では…」。隊長が申し訳なさそうに小さな声でそれを告げた。

「じゃあ、中の技師は？」

「爆破なら可能かもしれませんが。自衛隊の出動要請を出された方がいいかと思います。」。レスキュー隊の敗北宣言だった。

「わかりました。ありがとうございます。」

「力及ばず申し訳ありません。」。レスキュー隊は現場から去っていった。

「再度センター長に現状報告を。自衛隊の出動要請を頼んでくれ！」。また大きな声が廊下一杯に響き渡った。

同じ頃、各保育園でも事態は深刻の一途を辿るばかりだった。

都内のある保育園でレスキュー隊が突入しようとしたその時、保育園から銃が発射され、レスキュー隊5名中4名が死亡1人重体、警察官10名中7名死亡2人重体1人重症という惨事になった。保育園内の自動工作機械が武器を作ったのだ。既に無防備に入る事は不可能だった。

「第六（SAT）を呼んでくれ！すぐにだ！」。待機していた警視庁の警視は、本部にSAT（特殊急襲部隊）に連絡した。

※ 第六＝SAT：警備第一課、旧称：第六機動隊、現：警視庁警備部警備第一課管轄 SATの行動は早かった。10分ほどで約10名の部隊が到着した。保育園に到着するやいなや、すぐに警視庁の警視から保育園の見取り図や設計図、今まで受けたの攻撃の種類や方法・試してみた事などを詳しく聞いていた。

「そうですか。学習型人工知能に自動工作機械でしたね…では更に強力な武器を装備している可能性が大ですね。」。SATの隊長は”攻め所”を模索していた。

「はい、毎時間、いや、毎分毎に進化しているようで、もう、うちの機動（機動捜査隊）では手の打ちようがありません。」。警視は悔しがった。

「正面突破は無理だな。数箇所から攻めなくては…」。SATの隊長が呟いた。

「足りないな。増援の要請だ。」。SAT隊長は増援の要請を連絡した。その間、副隊長と作戦を練り上げていた。他の者は、もう園児とSATの安全を願いながら、その行動を見ているしかなかった。そして間もなく増援部隊が到着した。隊長・副隊長4名が地図を見ながら、時折建物の方向に指を指しながら色々話をしていた。

「集合！」。どうやら突入方法が確定したらしい。SAT隊長達が部隊全員を呼んだ。

「作戦が決まった。これから全員を4班に分け、4隅から同時に突入する。建物の角から正面の園児搬入口までは約25mだ。若干扉が小さいから十分気を付けるように。裏口も同じ場所にあるが、職員の出入り口専用なので、こちらのほうが大きい。合図を出したら1・3班はなるべく気を引く行動を取り、援護に回れ。武器の発射場所や防犯カメラが特定出来れば、破壊して構わん。2・4班は援護が安定したら、即突入するように。待機位置は、ここと、ここ…」。指示が始まった。全員に地図と見取り図・設計図などが渡された。

「いいか！相手は機械じゃないと思え。無線は傍受されている可能性がある。乱数表を渡しておくので1つの交信毎に表の順番通りチャンネルを変えて交信するように。それから、少し遠くから回り込んで接近に臨むように。カメラはきっと見ているはずだ！そして失敗は許されないぞ。園児と保育士、そして警備員の命が掛かっている。取りこぼしの無い様、今生きている者の全員救出を目指せ。いいな！」。隊長は気遣いながらも隊員全員に気合を入れた。

「最後に……」。隊長が更に声を掛けた。

「……部隊全員、必ず生きて帰ってくるように！」

「了解！」。気合の入った隊員達は、各班に別れ、待機場所へと向かった。

数分後、第一報が入った。

「3班、待機完了！」

「1班、待機完了！」

「4班、待機完了！」

「2班、待機完了！」

全員が待機場所に着いた。後はGOサインを待つだけだ。

数十秒間の緊張が、数時間にも感じられた。隊長の無線のチャンネルが変えられた。

「1班・3班、突入援護開始！」

「了解。突入援護開始します！」

保育園の建物の対角線上で待機していた1班と3班が動き出した。

「突入」

「よし！突入開始！」。1班の班長と隊員が動き出した。

「突入、始め！」。それを見ていた3班の班長と隊員も動き出した。2班と4班の班長は、保育園が1班と3班に気を取られるのを待った。

「パン！パンパン！…がシャン…」。乾いた音と共に、何かが壊れた音がした。間もなく無線が入った。

「こちら3班。カメラを2台破壊し、更に前進中。どうぞ！」

反対側でも銃声が響き渡った。

「こちら1班。カメラ1台を破壊し、前進中。目標地点まで、あと15m。どうぞ！」

「了解！」。2班と4班の班長が本突入のタイミングを計っていた。

「…おかしいな？」。警視庁の警視は保育園からの反撃が無い事に疑問を感じていた。先程の警官隊の時とは様子が違う。諦めたのか、それとも更に進化したのか…息を呑んで見守った。

「こちら1班。外壁まで到着。指示を待つ。どうぞ！」。間もなく3班も無線を送ってきた。

「こちら3班。外壁まで到着した。待機する。どうぞ！」。準備は出来たようだ。

数秒の“間”をおいて、SATの隊長が指示の無線を送った。

「突入！」

2班と4班の突入が始まった。しかし、“アキ”は全てお見通しだった。保育園に対し、別の場所にカメラを取り付けるよう指示を出し、じっと彼らの行動パターンを読んでいた。

「こちら2班。正面搬入口まで到着。これから突入する。」

「こちら1班。職員出入り口まで到着。突入を開始する。」

扉は頑丈だ。隊員達はグラインダーでドアに穴を開け突入ようとしていた。そして、もう数秒後にドアが開こうとした、その時…。

“シュー”という空気を切り裂く音が一瞬間こえた。そして小さな地響きと共に「何か」が爆発した。そして、それは2回、3回と数を増やしていった。

「しまった！」。SATの隊長が一瞬凍りついた。そして無線が入った。

「コード・レッド！突入失敗。繰り返す。コード・レッド！突入失敗。相手は園内にロケットランチャーらしきものを装備している模様。死傷者多数。これから撤退……あ——！！」

次々と保育園の周りで爆発音が響いた。

「撤退！撤退せよ！撤退だ！」。SAT隊長は全員に撤退を指示した。しかし、その無線に応える者は誰一人もいなかった。

「…ぜ…全滅だ…もう少し…早く気付けば…」。SAT隊長の体が、その恐ろしさに耐え切れず、小刻みに震えだした。

「警視…申し訳ありません。SATでも…うっ…SATでも…うっ…」。全ての部下を失ない

、嗚咽をあげながら警視に謝るSAT隊長の顔は、まるで喧嘩に負けた子供のように涙と鼻水でぐしゃぐしゃになっていた。そしてその場にへたり込んだ。

「こちらこそ…かなり甘く見ていたようです。あれは毎分ごとに進化する”化け物”です。隊員全員が…残念です。」。もう、残る道は1つしかなかった。自衛隊と在日のアメリカ軍だ。それしかない。

「警視總監に連絡を。自衛隊の出動要請を頼んでくれ。再度作戦会議だ。」。警視は、座り込んで泣き崩れたSAT隊長を乗ってきた警備車両に戻し、運転手替わりの警察官に「第六に送ってあげてくれ。」と指示を出した。警備車両はゆっくりとその場から去っていった。警視はその車体が小さくなって見えなくなるまで見送った。

”アキ”は、無線の内容を全て把握していた。一番電波の強い物だけをピックアップし、あとはデジタル信号の暗号化の解読だけだった。解読は”アキ”にとってはそう難しい事ではなかった。

その頃、園内にも事件が起きていた。突入開始と同時に内部の警備員がモニター室の中で窒息死。園児も十数分おきに絞殺されていった。保育士も抵抗を試みたが、最後には目の前の園児が次々と絞殺され、遺体安置室に搬送されて行くのをただ泣きながら見ているしかなかった。外では何十回も爆発の音が聞こえ、その度に保育園が衝撃波で何度も揺れた。

「何？今、何が起きてるの？コンピューター！」。しかし、一向に返事は無い。黙々と次の「絞殺」の準備をしていた。

「何で！何でなのよ！！！」。1人の保育士がモニターカメラに向かって叫んだ。しかし、それに対する返事が返ってくることも、無かった。

「うん…なるほど…え？本当か？…そうか…残念だ。うん、分かった。要請してみるよ。じゃ。」。東京センター長は総理官邸に居た。電話は二階のホールで受けた。間もなく各センター長も到着する予定だ。地下の”総理官邸危機管理センター”に戻ると総理大臣と少子化省大臣・警察庁長官・防衛大臣が待っていた。警察庁長官もほぼ同時にSAT全滅の連絡を受けた様子だった。よほど無念だったのか、右手の拳が真っ赤になっても、まだ拳を握り締めていた。

「総理、まだ他のセンター長が見えないのですが、緊急案件ですので先に宜しいでしょうか？」。東京センター長は話を切り出した。

「SAT全滅の件かな？」。総理の耳にも事件の話が入っているらしい。

「そうです。時間を追う毎に”AKI9000”は進化しています。自衛隊の派遣をお願いします。時間がありません。」

「分かった。自衛隊を派遣しよう。防衛大臣、すぐに作戦を練って出撃させるように。私からはアメリカ国防省に国内にいるアメリカ軍の応援を要請してみる。」。総理が決めた。最終決戦だ。勝っても負けても、もうこれが最後だ。

「分かりました。直ちに連絡を。」。防衛大臣は部屋の隅に向かい、専用回線で指示を始めた。

「東京センター長。」。総理が声を掛けてきた。

「2025年当時にシステムの構築に関わった人は…もういい年だと思うけど、掻き集められるかな？やはりこの件は、設計した人間が一番良く分かっていると思うんだが。」。まずは基本中の基本と言った所か。だが、確かに正論だ。

「音信不通の人も結構いますので…そうですね、半分くらいなら集まるかもしれませんが。連絡を取って見なければ分かりませんが。」。東京センター長は自信なさげに答えた。

「いや、何人でもいい。全員、ヘリと…遠くは自衛隊に頼んで戦闘機を出してもらおう。民間機もだ。連絡と指揮を頼む。」

「分かりました。では、早速。」。東京センター長はある人物を思い描いていた。そして、プログラムのチェックが出来ないうちに事件がここまで拡大してしまった事に少し罪悪感があった

。

「まずは先輩に連絡してみよう。」。忠告をくれた先輩の顔の広さに賭けてみる事にした。

「救出作戦」

総理官邸の周りはマスコミで混み合っていた。各センター・保育園・・・関連する全ての場所にマスコミ達が詰め掛けていた。既にこの事件は各放送局のライブ映像として配信されていた。もう報道管制は難しい状態だった。

「はい・・・ええ・・・そうなんです。お願い出来ますか？」。東京センター長は忠告をくれた先輩に電話をかけていた。

「うん。何とかしてみよう。で、その後は何処に集合すればいいのかな？」

「いえ、連絡もこちらに来られてからお願いします。総理官邸でお待ちしています。迎えにヘリを出しますので、ご自宅の近くに公園などは？」

「総理官邸??？」。少し驚いた様子だ。が、すぐに気を取り直して話し始めた。

「ああ、2、3分歩いた場所に大きな空き地があるよ。」

「地図にありますね。分かりました。では、こちらはすぐにヘリを出して待機させますので、準備が出来次第、空き地にいらして下さい。では、宜しくお願いします。」。拝むように電話を切った。フロアで待機していた自衛官に頼み、空き地まで先輩を迎えに行くように頼んだ。

東京センター長はすぐに総理官邸危機管理センターに戻った。が、総理は不在だった。

「総理は？」

「只今、アメリカの大統領とホットラインで通話中です。」。秘書らしき人物が答えた。他の大臣たちは各所の連絡を終え、戻ってきていた。

「総理が不在ですが。」。東京センター長は話し始めた。

「まずは1人・・・以前、会社勤め時代の私の先輩なのですが、"AKI9000"のコア部のプロジェクトを担当した人物です。人脈が広いので、こちらに着いてから知る限り全員の連絡を取ってもらう事にしました。ヘリを迎えに出しましたので、すぐに到着すると思います。」

「そうですか。分かりました。」。少子化大臣と周りの大臣達が頷いた。

間もなく何機ものヘリの到着音が聞こえた。各センター長が顔をそろえた。そして少し遅れて先輩が到着した。ヘリを全て着陸させるには官邸前の庭だけでは足りず、周囲の幹線道路が封鎖され、臨時のヘリポートになった。総理もホットラインを終え、席に戻って来た。

「アメリカ軍が手伝ってくれるそうだ。厚木・横田・横須賀の部隊長も間もなく到着するだろう。特別災害本部をここに設置しよう。」。総理の顔に若干の余裕が見え始めた。

「で、あなたですか？連絡を取ってくれるのは？」。総理が到着したばかりの先輩を見つけ、話しかけた。

「ええ、どこまで出来るか分かりませんが・・・名簿は手元にあります、なにせ人数が多いので、何人か貸して頂きたいのですが。」

「いいでしょう。必要な人数を秘書に。頼みます」。秘書が先輩を別の部屋へと案内した。

「では、専門的な知識は無いが、皆が来るまで事件の始まりから今までを順に整理しておこう

。時間がないからね。」

東京センター内では自衛隊が扉を開ける為に四苦八苦していた。センターを立ち入り禁止とし、センターの数人を除いて屋外に避難させた。最終手段に爆薬を使う為だ。

プラスチック爆弾・TNT・隊戦車砲・・・しかし扉は少し傷が入った程度で何事も無かったように、そこにあった。

「扉は駄目だな。頑丈すぎる。先に中の技師の生存の可否の確認をしよう。」。小隊長が別の案を考えた。

「壁の厚さは？図面通り50cmですか？」。残ったセンターの技師に聞いた。

「はい。間違いありません。」。技師が答えた。

「分かりました。おい！ドリルと遠隔のファイバースコープを用意しろ！50cm穿孔だ！早くしろ！」。小隊長は隊員に気合を入れた。

すぐに機材は用意された。小隊長と技師は設計図を見ながら、話をしていた。中に取り残された技師に一番近いと思われる地点を決めた。出口すぐ横の壁から穿孔する事が決まった。

「穿孔、開始！」。号令と共にドリルが壁の中に少しずつ入っていく。そして数分後、直径3cmほどの穴が開いた。遠隔形ファイバースコープが送られ、中の様子が映し出された。そして扉の前で倒れている技師を発見した。

「酸素濃度が8%です。」。もう扉がロックされたのに気付いてから1時間になろうとしている。

「残念ですが・・・間に合いませんでした」。小隊長は申し訳なさそうな顔をしながら、残っていた技師達に伝えた。

その時、モニターが一瞬紫色に光った。そして真っ黒になった。

「どうした？」。小隊長が隊員に聞いた。

「紫色の閃光の後に、画面が出なくなりました。計測器も測定不能です。」

「まずい！回収！回収して穴を埋め戻せ！早く！」。小隊長が焦っている。

回収されたファイバースコープの先端は、ものの見事に融けて無くなっていた。

「紫か？確かに紫だったんだな？」。小隊長は隊員にもう1度確認をした。

「間違いありません。確かに紫でした。こちらの技師も見ていました。」。隊員が答える。

「ええ、紫でした。間違いありません。」。技師も続くように答えた。

「紫・・・紫・・・」。小隊長は少し考えていた。そして思い出したように口を開いた。

「レーザー兵器だ。紫は窒素・・・何でこんなものが扉の向こうに・・・？そんなに重装備なのですか？」。小隊長が技師に聞いた。

「いえ、中は大型のコンピューターと自己修理用のロボットと自動工作機器・・・あ！」。技師が気付いた。

「小隊長、これはコンピューターが作ったに違いありません。レーザー発射装置まで作るとは・・・」。技師も驚きを隠せなかった。しかも大気組成の78%を占める窒素を使うとは・・・理論

上は「無尽蔵」ということになる。

「残念ですが、現状での私たちの出来ることはここまでです。幸いこのセンターではまだ被害が少ない。今のうちに全員避難した方が得策だと思います。避難しましょう。一時撤退です。」

「そうしましょう。」。センター内に残った技師達と自衛隊員もセンターを諦め、一旦外に退避した。

”AKI9000a”がレーザー光線を工作し、使用したという話は、すぐに総理の耳にも届いた。

ちょうどその頃、テレビでこの先を見守ろうとしていた私の家にも電話が掛かってきた。官邸への呼び出しだった。

「多分、呼ばれると思ったよ。あいつなら…仕方が無い。行くか。」。私は昔の資料を少しとメモリチップや接続コネクタを数本手に取り、身支度を済ませ、家の裏手にある公園でヘリと合流。総理官邸へと向かった。

官邸の屋根や庭はヘリで一杯になっていた。ヘリを降り、官邸内に入って案内を受けながら理官邸危機管理センターに入った。どうやら私が最後の1人だったようだ。集められた十数人の中には、旧友が数人見えた。これが初期のプロジェクトのメンバーの一部なのだろう。

「ようこそ。これで全員だな。」。総理が立ち上がった。

「作戦会議を始めて欲しい。どんな小さな話でも、1つずつ可否の検証をするように。必要なものは必ず用意するので、秘書に言ってくれ。情報は逐次そちらに優先的に流れるようにする。プランは全く違うセオリーのを2つ以上作って欲しい。出来ればそれが失敗した場合の対策も含めて、だ。時間が無いので早い回答が欲しい。記者会見は私が直に行う事にした。もうセンターだけの事件ではなくなった。私が出た方が無難だろう。会見が終わり次第会議室に向かう。では、宜しく。」。総理は記者会見に向かった。

皆が用意された会議室に通された。会議が始まった。会議室には壁一面にモニターが設置され、各部署からの状況が一目で把握出来るようになっていた。通信も出来るので、こちらから指示を出す事も可能だ。

作戦会議が始まった。

保育園では小康状態が続いていた。少なくとも外から見るとは。

しかし、中ではスケジュール通りに園児が次々と死体安置所に送られていた。そして自動工作機械は、”アキ”の指示の下、着々と防御・攻撃システムが作られていた。

総理の会見を1つのモニターが映し出していた。しかし、見ている暇は無かった。最新の状況の説明の後、色々と意見が出始めた。会議がだんだん本格的になってきた。

総理の記者会見が始まった。

「国民の皆さん。この度のこの事件は大変残念であり、また…」

国民の殆どが総理の記者会見の放送に見入っていた。

総理の記者会見の間、会議は停滞していた。攻略法が見つからないのだ。"アキ9000"は、メディア・インターネット・無線…現在のあらゆる分野において情報を取得出来るようになっている。今から新しいOSや新しい変調アルゴリズムを作る時間は無かった。もし、仮に出来たとしても、"アキ"がそれを突破するのはそう時間が掛からない事だろう。皆、悩みながら提案は出すものの、その提案はことごとく「削除法」によって消されていった。パソコンのモニターが何度も文字で埋め尽くされながら、また消えていった。

「この会議も"アキ"にモニターされてるんだらうな…」。1人の年老いた技師が、そう呟いた。

「そうだらうな。"アキ"は国家の機密以外の情報ならどこにでも侵入できるからな。」

「まずは"通信と電気"の遮断が先決と思いますが。」。若い技師が意見を述べた。

「そうだね。でも、通信は切れても、電気は外の配線を切断しても原子力型自家発電装置が自動で作動するから、ほぼ半永久的に作動はするよ。それに、1ヶ所の通信を遮断しても、合議制のバックアップ式だからあまり意味が無いんだよ。」。年老いた技師が言った。

「では…もし、同時に通信と電気を遮断したらどうなりますか？」。若い技師が尋ねた。

「ああ、それはいい考えかもしれない。5台で合議も指令も出せない状況は"アキ"の想定外かもしれないね。でも、もしかしたら、保育園のネットワークがそれを補完する可能性はあるよ。」

「では、保育園も含めて全て一斉に遮断するというのはどうでしょう？」

「孤立…か。これは使えるかもしれないね。しかし、その後はどうする？通信は？全て見聞きされているぞ。」。逆に年老いた技師が尋ねた。

「それは…分かりません…」。若い技師は残念そうに着席した。

「そう…か。いい提案がある。それに追加意見を。」。私は1つのアイデアが浮かんだ。

「どうぞ。」。議長の東京センター長が私を指さした。

「アナログですよ。アナログ。まずはホワイトボード…大臣、倉庫か何処かに残っていませんか？あと、カメラの配線を切ってください。マイクも使いません。モニターは双方向のコネクタを抜いてテレビ中継だけ残して下さい。まずこの会議室を孤立させて下さい。」。官邸なら多分ホワイトボードのような物なら残っているのではないかと考えていた。

「ホワイトボードなら、多分倉庫の奥に眠っていると思いますが。」。秘書が言った。

「では、説明は準備が済んでからにしましょう。皆さん携帯端末の電源を切って、紙と書くものを用意してください。話はそれからにします。皆さん、デジタル機器の電源は全て切ってください。」。若干ではあったが、確信はあった。

「では、準備が済むまで、少し休憩にしよう。」。会議は一旦休憩となった。

その頃、保育園では自衛隊が総力を挙げて園児奪還の行動を開始していた。既に救難隊では手に負えず全滅状態で、陸上からは戦車部隊が到着し準備を始め、空からは航空自衛隊の戦闘機が

スクランブルの指令を待っている状態と戦争さながらの攻撃を行なおうとしていた。狙い所は、勿論園児や保育士のいないモニター室近辺やコンピューター室だ。その壁を打ち破り、そこから進入しようという作戦だった。特殊部隊も到着し、準備をしながら戦車の攻撃の行く末を見守った。

「用意！」。保育園を包囲した戦車が建物の隅に照準を合わせた。

「射撃！！て～！！」。ドン、ドンと何度か地響きが鳴り渡り、戦車が主砲を撃ち始めた。

保育園の壁の周りが爆発の煙で一瞬見えなくなった。隊長は1発目の効果を期待しながら待っていた。数十秒後、煙が風にゆっくりと流され、壁の一部がその姿を現した。

しかし、思ったほどの効果は無かった。壁の一部がほんの少し崩れただけだった。

「二回目、用意！…て～！！」。外壁が少し大きめに崩れた。

「よし！行けるぞ！集中砲火に切り替える。崩れた部分に連続して一斉放火だ！」。保育園を取り囲んでいた戦車部隊が続々と1ヶ所に集まってきた。今度は壁の崩れた部分を囲うように扇形に展開し、一斉砲火の合図を待った。

「照準、合わせ～！」。全ての戦車が崩れた壁の一部を狙っていた。

「3回目用意！…て～！！」。隊長の号令と共に一斉砲火が始まった。

「次！4回目。て～！！」

「次！5回目。て～！！」。保育園が見えなくなるほど集中砲火を繰り返した。黒と灰色の煙が戦車をも包んだ。辺りが真っ暗になった。

「よし！撃ち方、止め～！装填して待機！」。隊長は5度目の射撃で一旦壁の状態を確認しようと砲撃を一旦中断した。そして、数分後に煙が流れ、壁が見えてきた。

保育園内では砲撃を受け、保育士や生き残った園児がパニック状態になっていた。

「え？何？何？？何なの？？？」。保育士は淡々と作業を続けるロボットと砲撃の凄まじさで、頭がどうにかなりそうになっていた。ただ耳を押さえ、目を強く瞑り、恐怖に耐えるしかなかった。また1人園児が絞殺され、遺体安置室に搬送されていった。数分後に大きな爆発音が鳴り響いた。保育園が壊れるのではないかというくらい大きく揺れた。そして、その爆発音が止まった。

「何？？？」。隊長が目を疑った。壁は確かに崩れた。しかし、その先に、樹脂のようなものらしい内壁があった。その内壁は砲弾の爆発で一部が黒くなっていたものの、傷1つ、凹みの1つさえ見る事が出来なかった。

「もう1発だけ…撃ってみるか。」。隊長の自信が少し揺らいだ。

「6回目、用意！て～！！」…数分後、内壁は何事も無かったようにそこにあった。

「撃ち方、止め～！」。もう戦車では歯が立たなかった。隊長は、呆然と崩れた壁の辺りを見つめていた。

「こちら、陸上自衛隊、東部方面隊第一師団。破壊工作は失敗。保育園は新たに頑丈な内壁を作った模様。繰り返す。こちら東部方面隊第一師団。作戦は失敗に終わった。保育園は新たに

頑丈な内壁を作った模様。航空自衛隊の出動を要請する。」

無線が終わるか終わらないかという時、保育園から1台の戦車に向かって数本の紫色の閃光が走った。その閃光は戦車を突き抜け、数十メートル後ろに植えてあった木まで到達した。木はあっという間に炎に包まれた。

「まずい！退却！全車全速で退却だ！」。戦車が全速力で退却を始めた。取り残された1台の乗員の生きている者は戦車を飛び降り、走って逃げた。

航空自衛隊はスクランブルの準備をして待機していた。指令本部から連絡が入った。スクランブルの指令だ。スタッフは慌ただしく動き始めた。航空管制が敷かれ、空域制限が行われ、民間機は現在位置から最も近い空港に緊急着陸するように指示が出された。何機もの航空機の着陸には時間が掛かる為、在日米軍の基地や自衛隊の基地に着陸する民間機もあった。超法規的措置だ。

「JASDF 1, wind 010 degrees at 5 knots. Runway 2. Cleared for take off. Scramble is permitted.」

「Tower, ASDF 1 arrived at Runway 2. Scramble is started.」

「It consented. 以降は緊急ですので日本語で結構です。」

「了解！」

1番機がアフターバーナーを全開にして滑走路を走り始めた。すぐに2番機も後を追った。

「2番機、現在第二滑走路。続いて離陸する。」。1番機の機首が上がろうとする時、2番機も滑走路を走り始めた。

「了解！」。5機の戦闘機が轟音を靡かせ、立て続けにスクランブル発進した。

離陸してから1分も経たないうちに、1番機が保育園の上空に到達した。

「こちら1番機、目標を補足した。ステルスモードにて旋回し、指示を待つ。」。後を追って2番機、3番機と次々に保育園上空を旋回し始めた。

「全機、目標を補足。旋回中。指示を待つ。」。全機が揃った。

指令から無線が入った。

「こちら指令、全機に告ぐ。保育園隅に、陸上が破壊した壁がある。目視で確認出来るか？」。戦闘機は速度と高度を落としながら、ゆっくりと保育園を1周した。

「1番機、目視確認完了。2番機、どうぞ。」

「2番機、目視確認完了。」。全機が目視の確認を完了した。

「40式戦車の150mm砲でこれだけか……」。1番機の隊長は保育園のその頑丈さに驚いていた。

「サイドワインダーじゃ無理だな。指令、こちら1番機、どうぞ。」。指令を呼び出した。

「こちら指令、1番機どうぞ。」

「サイドワインダーでの破壊は無理と見た。当初の二段攻撃の予定を変更しAGMのみで対応する。第2班の応援を至急頼みたい。どうぞ。」

「了解。直ちに第2班をそちらに向かわせる。第1班の攻撃を許可する。以上。」。攻撃命令

が下った。

「攻撃許可、了解。」

「全機に告ぐ。これから目標を攻撃する。私の後に続け。1番機の発射、離脱直後に2番機が発射。以下同様、連続して攻撃を行う。目標のロック・オンを再確認せよ。攻撃開始。」。もう1度大きく旋回した隊長の1番機が真っ直ぐ崩れた壁に向かっていった。そして、両翼の下に装備されたミサイルを4発同時に発射した。

2機目、3機目…と順調に進むはずだった。しかし、“アキ”はこの攻撃を事前に無線傍受して知っていた。1機目の攻撃が終了後、またレーザーが発射された。“アキ”は残りの4機のミサイルを狙って打った。“アキ”にとってはステルスモードなど関係なかった。紫外線・赤外線・X線、モードを変えながら戦闘機の位置を完全に把握していた。

1番機以外は射出レバーに手を掛ける時間も無かった。あっという間に4機の戦闘機は地上に燃え落ちた。

「メイデー・メイデー。4機がレーザーにて墜落。ミサイルを狙われ空中爆破にて生存者なし。当機も両翼にダメージを受け操縦不能。脱出する。」。射出装置のレバーが引かれ、隊長のシートが機体から飛んだ。

隊長が発射した4発のミサイルは命中したが、保育園の内壁に傷が付く事は、無かった。

そして、初めて“AKI9000”がスピーカーを使い、外に向かって第一声を上げた。

「抵抗は、無意味だ。」

「隔離会議」

官邸会議室では会議が進行していた。カメラの配線は切られ、デジタル機器も電源を落としていた。完全に「独立」した部屋になった。会見を終えた総理も会議室に訪れていた。

テレビは自衛隊の戦車が作戦失敗に終わった事や、戦闘機の空中爆発の瞬間、逃げ惑う人々の様子を刻々と映し出していた。「日増しに」どころではない。分単位で「AKI9000」は強くなっている。早く対策を打たねば。しかも、「AKI9000」が初めて言葉を発したという情報が入った。明らかに彼女は「感情」を持っていると確信した。どのプログラムが誤動作したのだろうか…それとも自己学習機能の中で「誤った学習」をしてしまったのか皆目見当がつかない。しかし、自らの意思で言葉を発したのは明確だ。「アキ」は一体私達に何を伝えようとしているのか？果たして、それが伝わったとしても、どのように対処すればいいのだろうか？

「では、先程の続きを始めよう。新たな情報も入った。時間が惜しい。アナログ…の話だったな。」。議長が会議の再開を宣言した。

「はい。アナログって？何をどうするんですか？」。若い技師は訳が分かっていないようだ。私は説明を始めた。

「「アキ」が出来たのは、2025年。当時は既に無線もテレビもラジオも音楽も、全てがデジタル化されていたでだろう。これは分かるかな？」。若い技師に問いかけた。

「はい。私はそれしか知りません。その時代に生まれましたから。」

「昔は、「アマチュア無線」ってのがあってね。2000年頃までは結構流行っていたらしい。知っているかな？」

「ああ…何か教科書で見たような…」。若い技師は自信なさそうに答えた。

「いや、実は私もね、親父が無線好きで、それで思い出したんだけども、多分…思うんだが、アナログ電波については「アキ」は知識が無いんじゃないかと思うんだ。どうかな？」

「いえ、それでは、万が一その電波に「アキ」が勘付いたら、アルゴリズムも何も関係なしで聞かれてしまうと思いますが。裸で街の中に出て行くのと同じだと思います。」。違う若い技師が反論した。

「分かってるよ。ただの電波は使わないさ。君、通信担当かな？」。少しは詳しそうだ。確かめてみた。

「はい。通信の主任技師をしています。」

「そうか。昔のアナログ電波も少しは勉強したかな？」

「はい。少しだけですが。」

「じゃ、話が早い。私も裸で街に出るような事は考えていないよ。SSBって覚えてるかな？」

「…聞いた事があります。…抑圧搬送波単側波帯…でしたか？」

「そうだ。シングル・サイド・バンドってやつだ。普通の受信機で聞くと、ただ音がゴニョゴニョとしか聞こえなくてね。60年位前に流行った無線の搬送波方法でね。もう40数年前には殆ど使われなくなった方式なんだ。「アキ」も理解するには相当時間が掛かるか、もしくは理解出来ず

に無視するかもしれないと思うんだ。データベースには無いからね。国立図書館の膨大なブックレットからSSBを知りえたとしても、かなりの時間は稼げると思うんだ。」

「あ…大学で実験したのを思い出しました。あれは有効かもしれません。」。この若い技師は、私の考えを理解してくれたようだ。

「それと、モールス信号。これはどうかな？」。更に尋ねてみた。

「大学の講義で無線の歴史について習ったときに聞いた事があります。短い信号と長い信号でアルファベットの代わりをする方法ですね？」

「そうか。知っていたか。良かった。」。私は一呼吸置いた。

「で、提案なんですけど、議長。」。議長の顔を見た。

「続けて。」

「先程までモニターを見ていたのですが、全ての回線を通じての通信は完全に”アキ”が掌握しているようです。だから先回りして防御や攻撃が出来るのです。自衛隊の攻撃の作戦内容については私は分かりませんが、全ての行動はお見通しだったと思います。その対策として、通信については、敢えて昔の方式、つまりモールス信号を先に…多分、こちらは早いうちに”アキ”が攻略するでしょう。攻略されたら、次はSSBを使った音声通信に切り替えます。単純だからこそ”AKI9000”がその仕組みを解読するのに時間が掛かると思うんです。私の思い付いたのはここまでなんですけど…」。本当にここまでしか浮かばなかった。これをどう生かすかが思い当たらない。

その時、”助け舟”が出た。

「じゃ、ウィルスでも蒔きますか！」。 ”AKIプロジェクト”にも参加していた旧友が立ち上がった。

「ウィルスって…今の”アキ”のセキュリティーじゃ効かないだろう。OSは特別に開発した”STARS”だぞ。Linuxやトロンとは訳が違う。」。誰かが聞こえよがしにポツリと言った。

「静かに！続けてくれ。」。総理がざわついた会議室の雰囲気締めつけた。

「アナログで思い出したんだが、もう流通していない昔のウィルスを使ったらどうかな？昔…いや、私も学生の頃習ったんだが、”BIOSクラッシャー”という普通のウィルスじゃないものがあったね。これは演算装置をもつコンピューターならOSは関係なしに効くんだ。2000年頃に一部で出回ったらしいんだが。但し、上手くウィルスを撒く事が出来れば、の話だが。」

「それで、その”BIOS何とか”をいつ何処でつかうんだ？」。総理が聞いた。

「電源切断の直後です。 ”アキ”のシステムが大幅に変わっていなければ、電源切断…いわゆる”停電”の状態になると自家発電に切り替わります。原子力なので、発電開始から電源再投入までは約4秒ほど掛かる筈です。その後再起動に15秒。この再起動の間はセキュリティーが一旦停止します。その間に切断した通信ケーブルからウィルスを送れば…多分成功するのではないかと。上手く行けば、立ち上がる時点で”AKI9000”が自己崩壊します。万が一立ち上がったとしても、周辺機器の認識が出来なかったり、動作がギクシャクしたりするはずですよ。人間で言えば、寝ている間に注射を打たれ、そのまま死に至るか、目覚めたとしても体のあちらこちらに麻痺が残ると言う事

です。時間があれば、もっと混乱するように”2つの違った話”もいくつか送信出来るかもしれません。」

「うむ。これで一案は決まりだな。Aプランとしよう。で、失敗した場合の対策は?」。総理が皆に尋ねた。

しかし、その問いに答えられる者は誰もいなかった。

「では、”AKI9000”が言葉を発したという点については、どう思うんだ?」。総理は質問を変えた。

「それは…多分、意思を持ったという他に無いでしょう。自己学習で得た可能性もありますし、プログラムのバグで、一定の範囲でしか作動しないと言うことも考えられます。それは作業を進めながらも確認出来ますので、後に回しましょう。」。私が総理に告げた。

「分かった…Aプラン1つか。それだけ…か。」。暫く考えていた総理は、立ち上がり、話し始めた。

「それしかないなら、それで行くしかないだろう。失敗の責任は私と大臣が取る。厳密な計画を立ててくれ。以上だ。始めてくれ。決まったら執務室まで報告を頼む。」。そういい残すと総理は会議室を後にした。

総理の退席後、計画を実行に移す為の会議が始まった。

「Execution. 」

「では、現場での通信と各種ケーブルの遮断、それにどうウィルスを感染させるか、この3件についての詳細な計画を立てよう。」。総理が会議室を出たのを確認した議長が議題を提示した。いよいよ本格的な作戦会議だ。

「まずは、通信からだな。お願いします。」。私が指名を受けた。私は立ち上がって計画を述べた。

「先程も言いましたが、現在はデジタル通信が進んだ時代でアナログ通信は、ほぼ使用していないという事です。”AKI9000”は2020年に計画され2025年に完成しました。”AKI9000”は、人間で言えばデジタル世代の申し子です。これは”勘”でしかないのですが、アナログに対しての知識が大きく掛けているか、もしくはまったく関心が無いと考えています。そこで、敢えて50年も昔の通信方法を利用して、現場で作戦を実行する人々の行動を把握出来ないようにしたいと考えています。」

「で、計画は？」。議長が聞いてきた。

「計画は、まずは通常のアナログ送信波を使って、モールス信号で通信を行います。当然1回ごとにランダムに周波数を変えて行きます。”AKI9000”が万が一それに気付き、解読が出来たとすれば何らかの動きが出てくると思います。気付かれたと確認した時点で、モールス信号からSSB、いわゆる抑圧搬送波単側波帯に切り替え、音声通信で現場の作戦を続行したいと思います。私からは以上です。」。着席した。もっといい案があるのだろうが、私にはこれしか浮かばなかったし、先程も大きな反対意見も無かった。自信はないが、現時点でのベストの選択だとは思っていた。

「何か意見は？」。議長が皆を見渡した。意見はなかった。

「では、通信は決まりだな。次に行こう。各種ケーブルの切断については、先程の技師。」。センターに勤める技師が立ち上がった。

「ケーブルの切断は、電源はタイミングがずれても良いのですが、通信リンク用のケーブルはほぼ同時に切断しなくてははいけません。先程ザッと調べておいたのですが、全国の保育園の数が、自治会単位で設置されていますので2500程あります。それと”AKI9000a～e”の5台。”AKI9000”のシステムは、保育園のシステムとそう大きな差がありません。”合議制”を利用しないという点と、データの蓄積容量が極端に少ないという点です。但し、”AKI9000”がシャットダウンされ場合のバックアップとして、全国ネットワーク網のプログラムが作動するように設計されています。」。若い技師は少し息を整え、周りを1回見回し、また続きをはじめた。

「先程どなたかの説明がありましたが、”AKI9000”の電源を切断すると自家発電に切り替わります。原子力なので、発電開始から電源再投入までは約4秒ほど掛かります。その後再起動に15秒です。保育園もほぼ同じくらいか少し早めに再起動が完了します。これらを考慮すると、システム上、電源の切断やプログラムの作動順番から考えて、まずは保育園の通信ケーブルと電源を遮断し、その後に”AKI9000”の通信ケーブルと電源を遮断して孤立化させるのが一番確実な方法だと

思います。」

「何か意見は？」。議長が、また皆を見渡した。手が挙がった。

「いいよ。言って。」。議長が電機メーカーの社員を指した。

「どうも…えっと。」。あまりこういう緊迫した会議には慣れていないようだ。

「作業の件なんです。」

「いいよ、意見言って。」。議長が諭す。

「監視のプログラムは当社の開発でしたが、先程ステルス戦闘機が爆破されるのをテレビで見ました。多分…ですが、レーダーや紫外線、暗視装置、熱感知、振動波、超音波などの現時点では考えられる全てのセンサーが工作されて使用されていると考えます。通信は分かりませんが、人の動きを監視すれば、ある程度先の行動が予測されてしまうと思います。」

「そうか。で、対策は？」。議長が聞いた。

「対策は…」。電機メーカーの社員が言葉に詰まった。

「いい案があるよ。議長！」。私の旧友が話し始めた。

「頼みます。」。議長が発言を求めた。

「シートだな。シートで作業場所を囲って、それから作業開始というのはどうかな？」

「いえ、それでは熱感知式のセンサーが…」。電機メーカーの社員が反論した。

「アルミと鉛だよ。アルミと鉛で何層かのシートを作ってそれで囲えば、まあ、多分大きな機械の熱は特定出来るだろうが、人の行動は見えなくなると思う。中の熱も人間の体温くらいに常時調節すれば、サーモグラフィーと紫外線や超音波を使った非破壊検査みたいなシステムは少なくともシャットアウト出来ると思うんだが。ただ、不審物と思われ、攻撃されたらどうなるか…それは分からん。私からは以上だ。これ以上頭に浮かぶものはない。」。着席してしまった。

「テントはうちの会社で作ります！」。また違う電機メーカーの社員が話し始めた。

「いいよ。続けて。」

「はい。今、話を聞いて思い出したんですが、一番外は保育園から出るレーザーに対抗出来るように鏡面仕上げの新繊維を…会社の実験室で基礎研究用に作ったものがありまして…需要がないのでお蔵入りでしたが。その次に熱遮断の為のアルミシート、次に他のセンサー対策に鉛シート、最後に補強用と室内の保温が出来るようにアラミド繊維の4層構造のシートがあればかなりの遮蔽性と防御力を得られると思います。以上です。」

「ほ〜う。面白いアイデアだ。で、すぐにでも生産を始められるのかな？」。議長が聞いた。

「はい、大丈夫だと思います。設計図をお渡ししますので、他社さんや町工場の方々、工業に携わる人達が全国で一斉に作れば流通時間もかかりませんし、大丈夫だと思います。先程各社の方々と話していたのですが、万が一に備えて全国の工場はいつ、どんな注文が来てもいいようにラインを停止して仕様変更出来るようにスタンバイしているそうです。数時間あればシートの作成は可能です。」

「それは凄い。すぐに始めてもらおう。電機メーカー皆さんはすぐに自社に戻ってアナログ通

信機とその防御シートを全国規模で生産するよう、指示を出してほしい。退席して結構だよ。あ、くれぐれも電子機器は外部とのネットワークとは隔離するように。カメラも配線を切って作業してくれ。」。議長が急（せ）かし、電機メーカーの社員たちは各々の会社に戻って行った。

「さて、これが最後だな？3つ目、ウイルスだ。どうですか？」。議長が旧友を見た。

「技術的には難しくないが、確率論の問題にも影響するんだ。失敗の可能性も否定は出来ないが。」。前置きを述べた上で話し始めた。

「通信リンク用のケーブルを切った後に電源ケーブル…だったかな？」。技師を横目でチラリと見た。

「ええ、その予定です。」。技師が答えた。

「じゃ、通信ケーブルを切った後に、コネクタなんか作ってる暇じゃないんで、剥き出した配線に直接パソコンを使って接続して、電源が切り替わった所でウイルスを撒きたいと思っている。但し、時間的に見て、15秒となればチャンスは1回か2回が限度だがね。」

「それは先輩が指揮を執って下さい。」。議長が指名した。

「うん。何とかしてみよう…昔を思い出して、ね。」。旧友が若かりし頃、そのチームを率いてプロジェクトに臨んでいた頃の鋭い目つきに変わった。彼はきっとやり遂げてくれるだろうと、私は確信した。

「これで決まりだな。大臣皆さん、これで如何でしょうか？」。大臣を一周見渡す。

「異存はない。君達に任せた。必要な権限も与えよう。物資は何でも調達するから遠慮なく言って欲しい。頼みましたよ。」。各大臣が相槌を打った。話は決まった。

「では、作戦会議の終了を宣言します。各自、自分の得意の分野・専門の分野でチームを結成してもらいたい。10分毎に進捗状況の報告を各大臣にするようにお願いします。私達センター長グループと大臣各位は、外で起きている状況やニュースを、知りえる範囲で10分毎に君達に報告する。知りたい情報があれば、すぐに連絡を。以上です。解散！」。

作戦会議が終了し、それを実行する為の作業や資材の製造が全国で開始された。

「ブラインド・フォールド」

作戦会議も無事終わり、官邸の廊下を歩いている時に、会議に残っていた若い技師がふと呟いた。

「街中のカメラも…監視されているんだよな…少なくとも資材搬入は監視されるだろうな…」

「そうだ！都内のカメラは問題あるぞ！」。旧友が大声を張り上げた。皆が旧友に注目し、足を止めた。

「カメラは問題ありますね。」。また声が上がった。

「よし、ここで話を決めてしまおう。そんなに難しい話じゃない。みんな、近くに寄って！」。旧友を中心に輪が出来上がった。

「多分、皆も同じ意見だと思うが、カメラの線は切らずに、カメラの前にモニターを設置して、同じ動画を繰り返し流すってのはどうかな？上手く行くかどうかは分からないが、暫くは騙せると思うんだ。」

「私もそう思いました。」。「私も。」。「私も」。皆が同じ事を考えていた。

「じゃ、警視庁と消防にお願いしよう。同じ時間に一斉に、機材が通るのが見えるカメラ全台数を対象に。お願い出来ますか？」。旧友が尋ねた。

「任せてくれ。必ず全て上手く騙すようにする。では、急ごう。時間がない。」。警視庁と消防は頷いて、足早に官邸を後にした。

「いや～。思い出して良かったよ。技師君、ありがとう。」。旧友は若い技師を、褒めた。

「すみません。何となく気にはなっていたんですが、会議の内容とは少し話題が外れていたもので。」

「いや、そんなことはなかったぞ。搬入を見られたら、一卷の終わりだからな。さ、時間がない。自分の持ち場に行こう。」

皆が自分の場所に散っていった。

少子化大臣と官房長官は、マスコミにあるお願いをした。カメラを隠す間、そして機材搬入～作業中は、ずっと保育園を映し、その模様だけを中継するように頼んだ。ハイジャックなどで突入の準備が進む時の常套手段だ。マスコミ各社はそれを受け入れ、大臣はタイムシフトのコピーを配った。これで”アキ”に気付かれずに作業が進む可能性が大きくなった。

保育園内は自衛隊の攻撃も収まり、外から見る限りでは平穏無事を装っていた。が、内部での作業は着々と進んでいた。

園児達は、ただ泣き叫ぶばかりだった。”順番”がきた時には大きな悲鳴が保育園内を駆け巡った。動転を通り越して、気がおかしくなってしまった保育士は、もう泣き叫ぶ気力もなく、感情も消えてしまっていた。ただ床に座り込んで黙々と作業するロボットをボーっと見つめていた。

警察と消防は総動員でカメラの前にモニターを設置する準備を進めていた。マスコミ各社は保育園や官邸をズームアップしたり、ズームアウトしたりしながら、時折レポーターが、「今の所は小康状態を保っております。」と報道し続けた。その背中では、電機メーカーの工場から届けられたモニターが着々とカメラの前に取り付けられようとしていた。

モニターの中に画像を加工処理する装置が組み込まれ、カメラがどの方向に向けられても、その捕らえた画面と同じものが映し出され、一旦加工され、機材搬入や設置の様子だけが消され、いかにも”何も無かった”画像を刻々と映し出す事になっている。

電気工事店や警察・消防…技術を持つ者が集められた。警察・消防・電機メーカーの技術者が音頭を取った。

「予定より早くモニターと無線が届きました。取り付けの準備が出来たら、私が合図を出すので、一斉にカメラの前にモニターを取り付けて下さい。各会社のカメラの筐体（きょうたい）に合わせて作ってあります。アセンブリ交換と要領は同じです。スイッチを入れ、カメラの上から被せる。それだけです。皆さんが各自の持ち場に到着したら、この赤い旗を胸元で小刻みに振ってください。大きく振ると他のカメラに気付かれる恐れがあるので、注意して下さい。旗が振られたら到着の合図と判断します。こちらからの合図が出るまで振り続けて下さい。こちらからの合図はモールス信号でチャンネルは1番を使います。短い信号を3回送ると、それが開始の合図です。3回目の信号が終わったら、すぐに取り付けを始めてください。終わったら、また旗を振ってください。暫く様子を見て、良かったら2チャンネルで短い信号を2回鳴らします。それが聞こえたら、その場を離れて戻って来て下さい。」。技術者が説明をした。

警察と消防は地図を配り、説明を始めた。

「カメラには盲点がある。背後だ。だが、そのカメラを映しているカメラがある。地図を見て欲しい。赤い線が引いてある。道路や民家の庭などを赤い線の通りに進めば、カメラに映らないで済む。この線の通りに進んでカメラまで向かってもらいたい。番号を付けたのは、カメラに付けられた番号と同じものだ。場所を間違えるとモニターの取り付けが不可能になってしまうので注意して欲しい。民間の方は電柱など、慣れた場所で作業を頼む。警察と消防は高層ビルの途中や橋の上など、危険な場所を担当する。皆、事故の無いように。では、宜しく。」

各人1台ずつアセンブリ付のモニターと無線機、そして赤い旗が渡された。皆、自分のカメラの番号と地図の道順を確認し、モニターを鞆に入れ、それぞれの場所に向かっていった。

「頼むぞ!」。音頭を取った警部が、ポツリと呟いた。

数十分後、シートと機材の用意が出来たと報告が入った。

「役者は、揃った。か。」。警部はモニターを持った彼らが持ち場に着くのを待っていた。

そして、指定場所に着いた者が、少しずつ、電柱の上やビルの上などから旗を振り始めた。数分後、全ての旗が作業員の胸元で小さく揺れていた。それを確認した警察官は、警部の下に戻り、報告をした。そして、また戻っていった。

警部は、無線を拝むように、一度両手で握り締め、そして、大切なものを扱うかのように、短い信号を3回送った。作業員は旗の竿を口で銜（くわ）え、カメラにモニターを設置した。数分間

、警部は待った。保育園に動きはないようだ。作業員全員がまた小刻みに赤い旗を振った。警察官が急いで戻ってきた。取り付けが無事終了したのを確認した。

「よし、成功だ!」。警部は2回短い信号を送った。間もなく作業員が無事に戻ってきた。

「機材搬入の用意を!」。警部は指示した。

待っていたかのように、続々と機材や小型のショベルカーを積んだトラックやワゴン車が現場に到着した。全国の保育園もほぼ同時に機材搬入を始めたようだ。

”アキ”は全国を網羅している画面の何台かに少しノイズが入ったのを感知していた。が、さすがのスーパーコンピューターも一度に全てのカメラを監視出来る訳ではなく、数秒おきは無作為に選ばれた数百台のカメラを数秒間ずつモニターしている。ノイズの出たカメラをロックして暫く様子を見ていたが、2回目のノイズは無かった。テレビ放送やインターネットも保育園を背景にしたリポーターの生中継や、”動きが止まった”という配信だけだった。特段変わった様子はないと判断した。”アキ”は単なるノイズとして情報を処理し、5台で共有したが、何台かの保育園周辺のカメラをロックし、モニタリングを続ける事にした。そして、作業続行の合議を5台全てが「可」と判断し、続行の指示が出された。ロックされたカメラは一見何事も無かったように道路と景色・行き交う人や車などを映していた。

保育園近くでは道路上に、鉄骨が組まれ、シートが張られた。ショベルカーが一地面を掘っていく。間もなくケーブルユニットが通っているチューブを見つけた。最後は手作業で慎重に掘られた。そして、完全に姿を現した。

「いよいよだな。」。数人の技師が集まり、配線を切断する準備が始まった。

「リテリエイション」

私も現場に向かった。1台のパソコンとジャンパー線の束を抱え、急いで現場に向かった。

配線の切断作業が始まりとしていた。技師達はゆっくりと配管に手を掛け、管を取り外し、配線を剥き出しにした。

「電源が先…でしたね。」。掘り下げた配管の下から技師が確認の為にもう1度上にいた警部を見上げた。

「そうだ。電源を先に切ってくれ。ここから勝負だ。」。技術を持たない警部は、腕組みをしながら事の行く末を見守っていた。

「警部、遅くなりました。配線の選択に時間が掛かりまして…」。一応、2種類の配線を用意していた。

「ご苦労様。構わんです。もう、電源の切断に入りますので。」

「よし、じゃ、私も降りるか。」。荷物を抱え、私も下に降り、通信ケーブルをパソコンに迂回する準備を始めた。

「この色と…それと…これだな。配線はこっちを使おう。」。何百本の配線の中から、光ケーブルとリンク用ケーブルを見つけ出した。光ケーブルはリークしてしまうと”アキ”にばれてしまうので、リンク用ケーブルを先にジャンプする事にした。配線の保護皮膜だけを剥がし、パソコンから繋いだケーブルの先端をクリップで留めていった。これで作業は終了だ。後は電源と通信の配線が切られれば、”アキ”が再起動した時には、通信の先端は私のパソコンになる。後はタイミングを見計らって、ウィルスを流すだけだ。

「準備、いいか〜！」。警部が声を掛けてきた。

「OKです〜！」。電源と通信ケーブルの切断準備は完了した。

「では、私が合図を送ったら、一気に切断してくれ。まだ準備が出来ていない所もあるようだ。少々休憩だな。」

下に降りていた4人…私を含めてだが、緊張しながらその瞬間を待っていた。休憩どころの話ではない。GOサインの瞬間に切断しなければいけないのだから。

静かな時間が数分、いや、10分ほど流れただろうか。警部の無線からモールス信号の音が流れてきた。警部はそれを聞きながら、一覧表と照らし合わせ、解読していた。そして大きく頷いた。

「全国で準備が出来たそうだ。今から約3分後に合図を送る。頼むぞ。」

「180…17179…178…」。心の中で時間を唱えながら、その瞬間を待った。

”AKI9000”が入っている5箇所センターも同様に作業が進んでいた。こちらは保育園のケーブル切断が終わり、その再起動中にケーブルを切断しなくてはならなかった。切断が早ければ、保育園のネットワークが必要な情報の完全な受け渡しをしてしまう恐れがあるし、遅ければ5台が瞬時に合議を始めて攻撃してくる可能性が高い。最もタイミングの難しい作業だ。

センターでの作業は、昔の開発陣や現職のセンター勤務者が当たっていた。若干心配ではあったが、少なくとも私より”アキ”を知り尽くしているし、旧友や先輩達、センターの人間ならきっと成功すると信じていた。

「1分切れるぞ〜!」。警部が私達に声を掛けてきた。間もなくだ。緊張が一気に高まった。その時だった。囲いの外にいる人間が悲鳴を上げた。

1人の警備員が囲いの中に駆け込んできた。

「保育園にレーザーで撃たれました!彼は…彼は…」。警備員は恐怖で声が引きつっていた。

「まずは水でも飲んで落ち着け。どうした?」。警部が声を掛けた。

「レーザに撃たれて…蒸発してしまいました…ああああ…」

「何故だ???」。警部は自分に問いかけるように声を荒げた。

また、レーザが撃たれた。囲いが少し揺れた。遠くの方で爆発音が聞こえた。確かに狙われた。間違いない。ただ、囲いの一番外は鏡面仕上げの繊維だったので、レーザーが反射し、何かにぶつかって破壊されたのだろう。1回は命拾いをしたが、そう何回も上手くは行かないだろう。”アキ”は賢いので、対応が早い。

警部が無線機でSOSを発信した。そして、私達がいる下を見た。

「何があっても続行する。10秒前…9…8…」。カウントダウンを始めた。私もパソコンを睨み、エンターキーに指をかけた。

間髪入れずに2回目のビームが発射された。ビームは囲いを貫通し、中に入ってきた。1回目のビームでほんの僅かに焦げた点を狙って”アキ”がビームを発射したのだ。驚異的な精度だ。

「3回目は、ヤバいな。」。私は心の中で考えていた。

「気にするな!…2…1…切ろ!」。バツン、と音を立て、電源の配線が切られた。

「よし、通信も切ってくれ!」。警部が激を飛ばす。通信ケーブルも大きな音を立て、切れた。次は私の番だ。

「10秒経ったらウィルス流して、光ケーブルを切りますから。」。警部にそう告げ、私は頭の中でカウントダウンをしていた。

「よし、今だ!」。エンターキーを押してウィルスが流れるのを確認し、光ケーブルを切断した。立ち上がりかかった保育園のシステムにウィルスが流れ込んだ。

”アキ”は感づいていた。ロックしてあった画面に面白い現象が起こっているのに気がついた。ロックされた画面は”可動式”のカメラからのものだった。”アキ”はカメラを左右に流して確認していた。そして、モーターの回転速度と届く画像の差に0.04秒の違いがある事に気が付いていた。更に保育園のカメラを通して周囲を見渡すと、そこには大きな直方体状の囲いが見え、外に数人の警備員が立っているのを発見した。その直方体の箱の下には、電源と通信のケーブルがある事を知っていた。

瞬時に5台の”アキ”が合議をし、「配線を切断しようとしている」と判断し、攻撃の命令を下し

たのだ。

5ヶ所のセンターもレーザーで攻撃を受けていた。中で作業していた技師数人が”アキ”の撃ったレーザーで蒸発していた。

「保育園はまだか！！」。こちらの警部は左足の膝から下が無くなっていた。撃たれた瞬間、上手くかわし、体には命中しなかったが、左足がレーザーに撃たれた。血は流れていなかった。レーザーで焼かれたからだ。警部は思ったより気丈だった。

「保育園、終了確認！」。残った警備員が叫んだ。

「よし、こっちも切断だ。開始！」。こちらもケーブルが切断された。

その時だった。シューという空気が切り裂かれるような音が聞こえた。小型のミサイルだった。自家発電切り替え前の最後の電力でミサイルを発射したのだ。ミサイルは命中し爆風で囲いが破壊され、地上にいた警備員や警部が飛ばされた。配線付近にいた旧友や技師達はその破片で血まみれになった。

旧友もかなりのダメージを受けていた。もう、助からないだろう。

「これが…最後の…仕事、か…因果応報…だ。あと…5秒…耐えてくれ…2…1…」。目の前が真っ暗になっていくその中で、旧友は最後の気力でエンターキーを押し、そのまま力尽き、二度と起き上がる事は無かった。

「抵抗は、無意味だ。」。5ヶ所の”AKI9000”は、ほぼ同時にスピーカーの音量一杯で叫ぶような声を出した。

園内は静かだった。一瞬停電がありロボットが停止した。が、それも30秒ほどでまた元の状態に戻った。何とか正気を保っていた数人の保育士はこの状態を敏感に察知した。

「救出…してくれるかもしれないな…」。

いざという時の為に、散らばって過ごしていた保育士を1ヶ所に集め始めていた。

「もうじき、助けが来るぞ！しっかりししろ！」。気の遠くなった保育士を元気な保育士が励ましていた。

ロボットは何事も無かったように、黙々と作業を続けていた。

「よし、一旦退却だ！」。保育園で配線切断に当たっていた警部が叫んだ。私と技師達は急いでしごを登り、走って逃げた。囲いを出た瞬間、中は爆発音と共に火の海に包まれた。間一髪で助かった。ここにもミサイルが打ち込まれたようだ。

「抵抗は、無意味だ。」。スピーカーから声が聞こえた。

「無意味じゃないぞ。ジワリと効いてくるからな。見てろ。」。私は心の中でそう呟いた。

「何とか助かったみたいだな。この分じゃ成功しなかった保育園もあるかもしれない。確認を取ってみよう。」。警部が無線でモールス通信を始めた。暫く通信の往復が続けられた。

「1割…200ヶ所程は駄目だったようだ。残念だが…人的被害も相当な数らしい。」。警部は悔しそうな顔をしながら私達に声を掛けてきた。

「大丈夫ですよ。少し時間が経てば、結果が見えて来ますから。」

生き残った保育園は、独自のネットワーク網を敷いた。たとえ保育園と言っても、生き残りが全てネットワーク網を作れば、“AKI9000”1台分には匹敵する能力を身に着けるだろう。ミサイルを撃って来たと言う事は、事前に必要な情報は“アキ”からダウンロードされたと見るのが一般的だろう。

「残ったか。陥落は険しくなりそうだ。」。私は残った保育園を孤立させる方法を考えていた

。

「モア・エフェクション」

無傷だった警察官が警部や負傷した技師などを抱え、必死で逃げた。保育園の死角に当たる場所で、暫く待機する事になった。

間もなく救急車が到着し、負傷者を病院まで搬送した。

「後は、運を天に任せるしかないのかな？」。ストレッチャーに乗せられた警部が私に向かってポツリと言った。

「そんな事はありません。あのウィルスは必ず効きますから。私はそう信じています。警部は安心して治療に専念して下さい。」。確証は無かったが、ウィルスは間違いなく保育園のコンピューターに紛れ込んだはずだ。警部に一声掛け、送り出そうとした。

「後は、残りの技師と頑張ってくれ。申し訳ない。後は頼んだぞ。」。警部の乗った救急車の後部ハッチが閉められた。テールランプがだんだん小さくなっていった。

私達がウィルスを感染させてから10分ほどが経った。退避した場所から少し保育園に近づいて様子を見る事にした。

保育園にさほど変わった様子は無かった。

「やはり、効き目は無かったか……」。後に続く作戦は持ち合わせていない。

「こちらの負けか……何とか効いてくれ……」。この時間、日本全国の殆どの子供達が保育園に預けられていた。何とか陥落にまで持ち込まないと、5年分の人口分布が“ゼロ”近くになってしまう。20年後～50年後の日本国の存在自体が危ぶまれる。祈るような気持ちで保育園を眺めていた。

「“アキ”の孤立計画は成功したようですよ。」。警官の1人が私の方に近づいてきた。

「そうですか。それは朗報だ。」。200ヶ所ほどのネットワークを1つ残してしまっただが、“アキ”を孤立させたのは大きな前進だ。後は孤立した保育園の工作用の資材をいかに早く消耗させるか、それと中にいる園児の奪還が早急な課題だ。保育園の資材が尽きてしまえば、怖いのはレーザーだけだ。

「ただ……」。警官が言葉を詰まらせた。

「どうしました？」。問い返す。

「東京センターで昔のお仲間の方が……」

「……そうですか。残念です。」。大切な先輩を1人亡くした。だが今は感傷に浸っている暇ではない。

「私達は一度官邸に戻ります。監視を続けて下さい。何か動きがあったら無線を。」。私は都内に散らばる技師達に官邸へ戻るように無線を送り、一旦官邸に戻る事にした。

官邸では総理や各大臣達が待っていた。結果の連絡は既に入っている様子だった。各方面に散らばっていた技師も次々と戻ってきた。が、やはり人的被害が大きかったのだろう。戻ってきた

のは6割程度の人数だった。皆疲れきった顔をしていた。

「200ヶ所程残ってしまったらしいね。」。総理が声を掛けてきた。

「はい。残念ですが、保育園から見やすい場所に埋設されたケーブルの場所では…」。技術も付け焼刃の人間が多かったので、致し方ないだろう。

「で、ウィルスの効果は？」。総理は結果を求めている。

「今の所、変化なしです。が、必ず効くと信じています。」。効いてくれる確証は無かったが、信じたかった。

「そうか、まだ結果は出ていないか。」。総理が少し残念そうな顔をした。

そこに医療機器メーカーと電機メーカーの技師・大学の研究員が現れた。彼らは小さな箱を幾つか持っていた。

「面白いものを作りました。皆さん、急いで会議室へ。」。皆が急いで会議室に向かった。

会議室に到着すると、すぐに彼らの説明が始まった。

「こんな事態の中で”面白い”という言葉を使うのは少々あれなんです、大学と医療機器メーカー共同で開発中だったものが完成しまして、これは使えるのではないかと改造して持って来ました。」

彼らが箱の中を私達に見せた。箱の中には粉のようなものが入っていた。

「粉か？これをどうするんだ？」。総理が少し怒ったような口調で彼らに問いかけた。

「いえ、これは粉じゃないんです。マイクロロボットです。」

「これが…か？どう見ても粉にしか見えんぞ。もう少し詳しく説明してくれないか。」。もう、総理の知識の範囲は超えてしまっていた。

「本来は医療用の…人間の体の中に注入して、特に癌細胞を破壊するように作られたマイクロロボットなんです、これにカメラと無線の送受信機を取り付ける事に成功しました。これを保育園やセンターのなるべく近い場所に撒き、内部に侵入させたらどうでしょう。小さいので、気付かれる確率は少ないと思います。破壊工作のプログラムは標的を癌から基盤の配線に変えるだけで良いですし、中の様子も上手く行けば見る事が出来るかもしれません。実行用のプログラムはこのメモリスティックに入っています。状況に応じて修正して使ってください。」

「画期的だ。時代も進んだもんだ。」。総理はびっくりした様子だった。彼らは更に説明を続けた。

「箱に端子が付いています。命令は傍受されると対抗策を打たれると思い、パソコンから直接箱の端子に必要な行動や目標などをインプットします。箱の中ではマイクロロボットの1台でもそれをキャッチすれば、5分ほどで全てのマイクロロボットが情報を共有します。後は近くに撒くだけです。自走式なので、じきに保育園やセンター内部に到達出来ます。」

「よし、すぐに撒いてくれ。」。総理は焦っていた。

「いえ…まだこれしかないんです。全ての保育園やセンターの分まで用意するとなると、4時間ほどは頂かないと。今、精密機器を生産出来る工場全てがライン変更を行っている最中です。今、4箱ここに持って来ました。」

「よし、じゃあ、3ヶ所で試してみよう。1つは近くの保育園だ。もう1つは東京センターだ。最後の2つは生き残った保育園だ。様子を見ているうちに4時間もあっという間に過ぎるだろう。一定量の出来上がり次第、各地に届けるといのは可能なのか？」

「出来ると思います。後は工場次第です。」

「よし。ちょうど万策も尽きた。これに賭けてみよう。すぐ実行に移してくれ」。総理がOKを出した。

「それでは、すぐに生産を開始します。」。彼らは数個の箱を残して、急いで官邸を後にした。

「箱が4つあるな。」。総理は試験場所を考えていた。そして、指示を出した。

「1つは君が君が担当した保育園に。後は指示通りの場所へ。変化があったらすぐに報告するように。」

「案件が1つあります。」。技師の1人が声を発した。

「どうした？」。総理が尋ねた。

「マイクロロボットだけ撒くというのは、少しリスクが大きいと思いますが。」

「どうしてだ？」

「保育園のカメラは作動しています。もし、この”粉”が爆薬などと勘違いされて、ビームで打たれてしまったら、それで一巻の終わりです。消毒でも撒くような偽装などをして、石灰かカルシウムの粉に混ぜ、保育園を囲むように撒いたほうが自然に見えると思いますが。」。私も確かに単体での散布はリスクが多いと感じていた。

「他の粉と混ぜても問題は無いのか？」。総理がメーカーの技師に聞いた。

「プログラムが終われば問題ないと思います。元は胃酸や胆汁にも耐えうる構造ですから。」

「そうか、ではそうしてくれ。急いで頼むぞ。」

会議は終了した。私は手渡された箱とプログラム実行用のプログラムが入ったメモリスティックを受け取り、用意された新しいパソコンを手にして、急いで保育園に向かった。

その頃、保育園内では少しずつ異変が起きていた。ロボットの動きが時折ぎこちなくなり運搬中の園児を落としてしまったり、急にお遊戯の時間に流れる踊りの音楽が数秒間流れたりなど、不思議な現象が始まっていた。

「今の見たか！外でも頑張ってくれているぞ！もう少しだ！頑張ろう！」。元気な保育士が、気の遠くなった保育士を励ましていた。

「絶対助かるから。な！」。そして、自分に言い聞かせるように大声で叫んだ。

保育園に戻った私は、早速プログラムを開き、箱にダウンロードした。建物内に進入し、制御室に向かい、進入後に基盤を探し当て、破壊する設定に変えた。無線で皆同じようなプログラムにするように指示し、そして願うように5分ほど待った。

「よし、出来た。後、お願いします。」。防塵服に身を纏い、それらしい格好で現れた消防隊の人達は、その箱の中のロボットを石灰の入ったミキサーに混ぜ、攪拌し、取り出し、分けて

スタート場所に散っていった。

そして何ヶ所かで保育園を取り巻くように粉を撒き始めた。その時、1人に向かってレーザーが発射された。レーザーの熱で消防士の1人が蒸発した。箱はさかさまになって地上に落ち、敷地を隔てる金網の横で散乱した。

「まずい・・・」。このままでは消防士全員が全滅だ。箱の蓋を開けたまま保育園の敷地内に投げ込むよう無線を送った。慌てた消防士達が、粉の入った箱を敷地内に投げ入れた。宙を舞った箱を保育園はまるでクレ射撃のように次々と打ち落としていった。保育園は敷地内に撒き散らかった粉を執拗にレーザーで撃ちまくった。何もかもお見通しの様子だった。

「しまった・・・モールス信号が解読された・・・」。こんなに早くモールス信号が攻略されるとは想定外だ。多分他の保育園も、もう攻略しているか、していなくてももう何分かで攻略されてしまうだろう。が、その命中精度は以前より若干落ちていた。ウィルスが若干なりとも効果を表したようだ。粉の一部は残り、保育園に向かって移動していた。相当数の粉が保育園の中に入っていった。

「ロボットは入ったが、無線はSSBに切り替えだな。」。日本全国の無線機に最後のモールス信号を送った。”通信は攻略された。次の通信手段に切り替える”

センターはもっと対応が早かった。粉を撒く前に次々とレーザーが発射され、あっという間に箱を持った職員や消防士達が消えて言った。そして同じように撒き散らかった粉や箱を狙って何度もレーザーが発射された。が、その精度は保育園同様、その命中精度には欠けていた。ウィルスが若干なりとも効果を表したようだ。粉の一部は残り、センターに向かって進んでいった。

生き残った保育園も同じような状況だった。あっという間に箱や作業員がレーザーで打たれ、ほぼ壊滅的な状況だった。こちらは生き延び、ネットワークを組んだだけの事はある、命中精度が高かった。中に進入出来たマイクロロボットはそう多くないと予想された。

「頼むぞ。1台でもいいから保育園に入ってくれ。」。私はセンターと生き残った保育園からの状況を聞き、祈るような気持ちでパソコンのモニターを見つめていた。

「ディストラクション」

ビームの嵐も収まり、少し静けさを取り戻した。私は保育園の死角になる場所からマイクロロボットが動画を送って来るのを待っていた。数分後、何台かのマイクロロボットからの動画が送られてきた。すぐに外付けのメモリに全ての動画を転送するようにパソコンの設定を変えた。多分、“アキ”や他の保育園のコンピューターもこの画像には気が付いてモニタリングしているだろう。しかし、もうモニターされても関係ない。孤立には成功したし、ウィルスも徐々に効き始めたからだ。

更なる攻撃はあるのか？それとも投降するのか、園児や保育士を道連れにして自己崩壊させるのか…全く先が読めない。

「他の場所の状況は、どうですか？こちらは何とかマイクロロボットが保育園に入っていました。」。私は無線で官邸に確認を取った。

「5ヶ所のセンターは成功したようです。ただ、ネットワークを組んだ”生き残った保育園”は失敗かもしれません。モニターに、まだ動画が出てきません。」

「分かった。ありがとう。」。…失敗か？いや、あれだけの台数を送ったのだから、少なくとも1台や2台は到達しているだろう。到達して欲しいと心から願った。やはり連絡はモールス信号より音声通信のほうが楽だ。微妙なニュアンスが伝わるので、細かな情報がやり取りが出来る。

無線のやり取りをしている間に、保育園からの画像が次々と送られて来た。子供の数は相当減ってしまった様子だった。ロボットが時折フリーズするのが見えた。保育士は取り敢えず全員生存の確認が取れた。

また、無線が入った。

「こちら官邸です。生き残った保育園の中に数台ロボットが侵入出来たようです。動画が入りました。」

「そうですか。で、状況は？」。やった。中の状況さえ把握出来れば、何か他の作戦も考えられるかもしれない。送られて来た動画を見て、私は愕然とした。園児は全て処分されていた。保育士も警備員も全てが遺体安置室に放り投げられた状態だった。

「報復…か…」。次の保育園も、またその次も…ネットワークを組んだ保育園に、生き残った人間の姿を見る事は無かった。

総理にもその状況が報告された。総理はモニターを見ながら悔しがっていた。そして思い立ったように電話をかけた。

「私だ。アメリカ空軍の出動の要請を頼む事にした。部隊長は間もなくこちらに到着するだろう。それと、電力会社の社長と技術員も呼んでくれ。」

「総理、どうされるのですか？」。残っていた大臣達が総理に聞いた。

「うむ…」。若干の沈黙の後に総理が話し始めた。

「ネットワークを組んだ保育園には、もう生存者がいない。爆撃で破壊することにする。現場

近くで電源を切る事が出来なかったので、発電所を止めて電源切断の代わりにしようと考えている。電源を止めた直後に一気に攻撃を仕掛けるつもりだ。」

「総理！万が一1人でも2人でも生存者がいるかもしれないのではないですか？もっと考えて下さい！」。大臣が食って掛かった。

「いや、もうこれ以上大きな代償は払えない。残念だがチャンスは1回きり、今しかないんだ。もし何人か生存者が居たとしても……」。総理は両手の拳が赤くなるほど力を込めて握り締めていた。もう、反論する者は居なかった。誰もが国益優先と判断した。

「警視総監、生き残った保育園周辺の住民を避難させて欲しい。」。総理は苦痛な表情を浮かべながら、警視総監に頭を下げた。

「分かりました。1時間内に住民の避難を完了させます。では、本部に戻りますので。」。警視総監は足早に官邸を後にした。

警視総監と入れ替わるように、アメリカ軍の部隊長や電力会社の上役や技術陣が官邸内に入ってきた。総理は挨拶もそこそこに電力の停止と爆撃の構想を話した。

「電力はすぐに止められます。緊急停止ボタンを押せば、3分ほどで供給がシャットダウンされます。」。電力会社の技術陣が答えた。

「爆撃の準備は整っているそうです。後は私のGOサインだけだ。と言っています。」。通訳が話した。総理は、レーザーの話・通信の方法・電源が落ちてからの再起動までの時間などを細かく説明した。そして、電力会社とアメリカ軍が時間を逆算し、電力遮断と爆撃開始の時間を打ち合わせた。

「理解したそうです。我々はこれから基地に戻って一番有効なミサイルや爆弾・航空機を選定して積み込む作業に当たるそうです。」。通訳が答えた。

「ありがとう。宜しく頼む。」。部隊長達は総理と強く握手を交わし、官邸を後にした。

「では、私達も準備がありますので。」。電力会社の社員達も官邸から足早に出て行った。

「この計画を皆に無線で伝えておくように。何かあったら連絡を頼む。」。総理は仮設された執務室へと入っていった。

総理の立てた計画は、すぐに私の所にも届いた。生存者がいない確率が高ければ、それも已む無しといった所だろう。選択の数は多くない。多少のリスクがあっても考えられるものから行動するしかないだろう。

「いよいよ大詰めだな。」。私はモニターを担当する保育園だけに絞ってマイクロロボットが映し出す映像を眺めていた。

マイクロロボットの軍団は、保育園内のあちらこちらから地下1階にあるコンピューター室に向かって進んでいた。その中の1群がコンピューター室に到着した。辺りを見回し、自分の現在位置とインプットされた地図との誤差を確認していた。

「よし！入った！そのまま進入しろ！」。遠隔操作の出来ないロボットだ。小さいながらもここまで辿り着いてくれた。不謹慎ながら、思わずガッツポーズをってしまった。

総理から無線が入った。1時間後に電気の供給停止を全国で行う事が決まったそうだ。

「発電機、頼めますか？」。近くにいた電機メーカーの技師に聞いてみた。

「あります。どうぞ。」

発電機のエンジンを掛け、パソコンに繋いだ。

「あと1時間で・・・」。私は期待しながらパソコンのモニターを見つめていた。

「爆撃」

「そろそろ始まるかな？」。私は横目でチラリと腕時計を見た。後10分ほどで爆撃が開始される時間だ。遠くの空に戦闘機と爆撃機が編隊を組んで飛んでいるのが見えた。

「そういえば、保育園って、通信ケーブルは遮断出来ましたが、無線は使えるんですよね。」。近くにいた技師が訊ねてきた。

「あ！」。誰もが気付いていない事だった。私もそこまで深くは考えていなかった。

「よく気付いてくれたね。官邸に報告しなきゃ。」。早速総理に無線を送った。

「…という訳で、“AKI9000”と保育園は無線で繋がっている可能性があるんです。すぐに妨害電波を流して下さい。でないと爆撃は失敗に終わるかもしれません。」

「ああ、分かった。自衛隊の通信班やあらゆる通信会社に連絡して妨害電波を出してもらうように頼んでおこう。技師には、良くやった、と伝えておいて欲しい。では。」。総理が無線を切った。

「総理が褒めてたよ。すぐに妨害電波の発信をしてくれるそうだ。その間は我々も無線やモニターが使えなくなるけどね。」

「あ…ありがとうございます。総理に褒められるなんて！」。技師は満面の笑みを浮かべて私を見ていた。

「さ、笑っている時間は無いよ。そろそろこっちも突入準備だ。」

「そうですね。では、準備に掛かります。」

自衛隊の特殊部隊が到着した。部隊長が私の所に寄ってきた。

「新型装備の実戦投入にこの保育園が指名されました。私が部隊長です。どうぞ宜しく。」。挨拶もそこそこに部隊長が矢継ぎ早に質問を並べてきた。

「ウィルスの効き具合はどうですか？突入出来そうですか？何時頃突入出来そうですか？」

「そう聞かれても…」。私は答えに詰まった。パソコンのモニターを見てもらうのが一番早いようだ。

「この画面を見て下さい。」。部隊長にモニターを見せた。

「これは、保育園の内部ですか？」

「そうです。マイクロロボットからの映像です。半数は保育園のコンピューターコアに直行させました。残りの半数は生存者の確認や内部の状況を映してからコンピューターコアに向かうようにプログラムしました。まだ生存者が居ます。この動画を見て下さい。」。私は部隊長に先ほど送られて来た園児や保育士の写真、死体安置所、医療室、廊下などの動画を見せた。

部隊長は保育園の図面とパソコンの動画を見比べて、突入の方法を探っていた。

「進入はどこから出来ますか？」。部隊長が聞いて来た。

「数時間前、SATが…失敗したのですが、入り口は2箇所です。表の園児用の搬入口と、裏口の職員玄関です。ここしかありません。」

「2ヶ所ですか…相当困難な仕事になりそうです。扉はすぐに開きますか？」

「ええ、多分…マイクロロボットがコンピューターコアの破壊を始めればどこかしらのロックが次々と解除されると思うので、手動で開けられるようになると思います。ただ…」。ここが心配の種だった。

「ただ…何ですか？」

「最初の扉はかなり頑丈で厚いです。ロックが早く解除されるか、保育園の動きが停止してくれればいいのですが。」

「では、適当な時間になったら、対テロ用の自動戦闘車両がありますので、数台出して様子を見る事にしましょう。」

「そうですね。私の予想では爆撃時間とほぼ同じくらいにはコアの破壊がかなり進むと思います。合図を出しますから準備をお願いします。」

「分かりました。2回に分けて試すことにします。では、準備に戻ります。」。部隊長は部隊の車両が待機している場所へと戻っていった。

私は腕時計を見た。あと数分で爆撃が、始まる。

その頃、空では戦闘機と爆撃機が生き残った保育園の上空にさしかかろうとしていた。もうじき生き残った保育園も航空機の群れを探知してしまうだろう。電源の供給停止が急がれた。

「Conning tower. This is "Team α -1". The target was confirmed with radar. We are stealth mode and turning. And waits for instructions.」

「Conning tower. This is "Team β -2 ". We also confirmed the target. And waits for instructions.」

「Conning tower. This is "Team θ -3 ". Waits for instructions.」。次々と目標がロックオンされていく。

「All team, this is conning tower. The instruction is time on schedule. Jamming wave will be sent soon. Communication becomes interrupted. Good luck!」

妨害電波が流された。そして、電源の供給が停止した。数秒の時間が流れた。保育園が一気に停止した。パイロット達は時計を見た。時間だ。

先頭を飛んでいた戦闘機が青いスモークを出した。合図だ。

「Open the hatch. Begin a bombing!, Go!Go!Go!Go!」

爆撃が始まった。絨毯の上を掃除機がゆっくりと進むように、丁寧に爆弾が投下されていった。戦闘機は急旋回して爆撃機の後方に回り、ミサイルで補助攻撃をしていた。

微かに爆弾の音が聞こえた。多分、一番近くの保育園だろう。

「凄いな…」。私はモニターに集中していた。コンピューターコアには既に8割のマイクロロボットが集結していた。

「部隊長！そろそろ1回目の準備を。」。隊員が5台の自動戦闘車両を持ってきた。自動車くらい大きなものかと思っていたが、そうではなかった。一見、戦車のプラモデルのような形をしていた。キャタピラがあり、自動小銃が前面・背面に2丁ずつ。格納式アームのようなものが両サイドにあった。

「思ったより小さいでしょう。でも戦力は、人10分以上の働きをします。前面にはグラインダーとプラズマジェット式切断機が備わっていますよ。」。部隊長が説明をしてくれた。

「では、1回目。スタートしましょう。」。私が部隊長に声を掛けた。

「用意！地面に置け！」

「地面に置きました！」

「電源投入確認！」

「電源、よーし！」

「発進！」

「発進！」

号令を受け、自動戦闘車両が保育園に向かって進んでいった。敷地内に入った所で、保育園に感知されたようだ。レーザーが発射された。2台に命中したが致命傷ではなく、残りの3台はレーザーが外れた。

「よし！効いて来たな。ざまあみろ！」。私は心の中で呟いた。

自動戦闘車両は前進を続けた。上手く行けば、扉の切断まで出来るかもしれないと思った。

またレーザーが外れた。1台の自動戦闘車両が大破した。

「命中率、下がってますね。」。隊長に話しかけた。

「うむ。しかし、まだ人間は投入出来ませんね。まずは残った4台が何処まで辿り着くか。その後2回目をやってみます。おい！プログラムの変更だ。武装も替える。」。部隊長は隊員を呼び、なにやら指示を出した。

レーザーが当たらないのが悔しいのか、保育園は滅茶苦茶な方向にレーザーを撃ち始めた。やがて、諦めたように乱れ撃ちを止めた。

どこからとも無く、空気を切り裂く細い音が聞こえた。そして自動戦闘車両の1台が爆発した。

「ロケット弾か！」。部隊長はやられたという顔をしていた。

「SATもこれで全滅でした…」。数時間前の嫌な思い出が蘇って来た。

「でも、命中率は下がってますね。勝機はあります。まあ、見てて下さい。」。部隊長は両腕を組み、じっと保育園を睨んでいた。

またロケット砲が発射された。ロケットは的を外れ、1台の自動戦闘車両の手前で爆発した。

その時だった。別の自動戦闘車両が保育園に向かって何かを発射した。発射された物は乱れ打ちされたビームの隙間を掻い潜って、屋根の上に落ちた。そして、爆発した。

「弾道を計算していたんですよ。多分、爆発した場所がロケットの発射口だと思います。」。部隊長は、まだ保育園を睨み続けていた。

「これは行けるな。2回目の用意！予定より早く投入する！」

「用意出来ました！」

「よし、出せ！」

「出します！」。また5台の自動戦闘車両が保育園に向かっていった。今度は全速力のようだ。ものすごい速さで、あっという間に4台が進む隊列の中に入っていった。

屋根が爆発した後、一瞬レーザーが止まった。すると4台が一斉に機銃を撃ち始めた。到着したばかりの5台も違う場所に向かって機銃を撃ち始めた。保育園の壁から何かが次々と落ちていった。カメラだ。保育園も焦ったのか、またレーザーを乱射し始めた。しかし、自動戦闘車両のいる場所近くには当たるものの、命中は無かった。ロケット砲は二度と動く事は無かった。

「うむ。上出来だ。」。部隊長は満足そうな顔をしていた。

「そろそろ出るぞ！全員、装備着用！フル装備！突撃準備！」。部隊長は大きな声で隊員に気合を入れた。

「全員、装備着用！フル装備！突撃準備！！」。伝令が叫びながら輸送車の方に走っていった。

「まだ、早いんじゃないですか？」。私は少し心配になって部隊長に聞いた。

「いや、見て下さい。保育園のコンピューターも弱ってきてるし、勝機は目前ですから。」。部隊長は顔色一つ変えずにまだ保育園を睨んだまま、仁王立ちしていた。

2回目の自動戦闘車両は少し改造が施されていた。機銃は大口径なものが前後に1丁づつ。サイドアームがある場所にはロケットランチャーの発射口のようなものが見えた。

「保育園のコンピューターはどうなりました？」。後ろを振り返った部隊長が私に聞いた。

「殆どコアの中に入りました。今、基盤の配線やチップなどの切断をしている最中です。もう少しで殆ど機能出来なくなると思います。」

改造した5台が狙っていたのは、レーザーの発射口だった。妨害電波が出ているのに、役割分担がきちんと出来ている。

「9台は通信…してるんですか？妨害電波が出ているのに、どうして…」。部隊長に聞いた。

「赤外線通信ですよ。それも角度を絞って漏れないように。こいつらは自走もしますが、本来はワイヤーか電波のリモコン式なんです。電波は傍受されると聞いてたので、通信方式を赤外線に変えたんです。それで情報を共有するんです。ほら、こちらの反撃が始まりましたよ。」

9台はレーザーの発射口とカメラを見つけ、次々と破壊していった。保育園の攻撃が、止まった。

「よし、我々の出番だ！園内の指揮は私が取りますので。失礼します。」。部隊長は走って輸送車に戻っていった。それと入れ替わるように、私の後方に、完全武装した自衛隊員が身を伏せながら部隊長の着替えを待っていた。

そして二手に分かれた自動戦闘車両は扉の破壊工作を開始した。金属と金属が摩擦する音、叩く音、大きなガスバーナーのような音が聞こえてきた。

爆撃隊は、約15分に及ぶ爆撃を行っていた。保育園は再起動する間もなく、情報も得られないまま陥落した。彼らの攻撃はピンポイントで行われた。非常用のバックアップ電源は原子力を利用したものだ。そのスペースだけは傷つける事無く、見事な爆撃を遂行した。

「Conning tower. The attack ended. We do not have damage. The nuclear reactor is safe. We secured the mastery of the air. There is no counteroffensive. It is complete victory. We return. I want you to prepare the beer and the sausage, Ha, ha!」。圧勝だった。爆撃機は先に帰還した。戦闘機

は取りこぼしが無いかどうか、上空を何回も旋回していた。間もなく軍用ヘリと輸送用のヘリの部隊が訪れると、彼等に敬礼をし、基地へと帰還した。

保育園を完全に破壊し、制圧したと無線が入った。既に瓦礫の撤去作業が開始され、警備員・保育士・園児達の遺体が次々と運び出されているようだ。絨毯爆撃の威力は、さぞ凄まじかっただろう。アメリカ軍の実戦の強さには驚かされるばかりだ。

「アメリカ軍も頑張ってくれた。さあ！日本の自衛隊も”大和魂”を見せてやろうじゃないか！行くぞ！お前ら！」

「よし！先行隊、扉が開いたら連絡をくれ。先行隊、突入！」

十数名の自衛隊員が保育園に向かって突進していった。

「奪還」

「うお～！！！」。雄叫びを上げながら、自衛隊の特殊部隊は一直線に保育園に向かって走っていった。

「また反撃してくるのではないか？」という私の考えはまだ完全に拭い去る事が出来なかった。が、内部の見取り図を渡し、電気・通信のケーブルを根こそぎ切り落とすように頼んであったので、そこさえクリアできればとも考えていた。複雑な心境で彼らの行動を見守った。

ちょうど特殊部隊が保育園に到達する頃、自動戦闘車両が遂に保育園の扉をこじ開けた。「ドン」という大きな音と空気の揺れと共に扉が前方に、倒れた。

隊長が隊員に指で合図を送った。SATが全滅した時の情報から学んだ彼らは扉の両サイドの壁際にピタリと身を寄せ、突入のタイミングを見計らっていた。更に隊長が自動戦闘車両を指差し、隊員に指示を送っていた。どうやら自動戦闘車両に内部を先行させ、その後が続いて突入するようだ。隊員が見取り図を見ながら、プログラムの書き換えや補修・装弾の補給などを行っていた。保育園の表には5台の自動戦闘車両が見えた。裏には4台の自動戦闘車両が待機しているのだろう。

5分ほど特殊部隊は扉の両サイドで作業をしながら辺りの様子を伺っていた。やがて5台の内の2台が先行投入された。

数メートル車両が進んだ所で、爆発が起きた。まだ保育園内の一部の自己防衛機能は生きているようだ。隊長は、1本の指を立て、両手でxの合図を出した。1台は破壊されたのだろう。更に隊長が残った自動戦闘車両を指差しながら、合図を送った。残りの3台の自動戦闘車両が保育園の中に入っていった。

また爆発音が鳴り響いたが、今度はマシンガンのような銃声も聞こえてきた。多分、応戦しているのだろう。音はだんだん小さくなっていったが、お互いの攻防は続いているようだ。自動戦闘車両が少しずつ中に進入しているのだろう。

一瞬、銃声と爆発音が止まった。隊長が扉の中を伺う。そして隊員達に手招きし、突入の体制が出来上がった。隊長は手のひらを見せ、一旦停止の合図を送っていた。隊員達は今にも飛び出さんばかりの格好で、隊長の手のひらをじっと見詰めていた。

数秒後、隊長の手が下がり、扉の中を指した。十数人の隊員が密集したまま一列になり、保育園の中に入っていった。

「ウィルスもロボットも自衛隊も頼むぞ！」。私は大声で保育園に身かって叫んだ。

保育園の中でも異変は更に大きくなっていった。マイクロロボットとウィルスの相乗効果で半数以上の機能が停止しかかっていた。保育園は残った機能の殆どをを防御に回していた。泣き叫ぶ園児を抱えたままロボットは停止し、灯りも最小限に抑えられていた。

「おい！今の爆発、聞こえたか？誰か助けに来てくれたぞ！しっかりしろ！」。正気だった保育士は、うな垂れたままの保育士に向かって声を掛けていた。

「子供たち…残った子供たちを助けなきゃ…」。弱っていた保育士がやっと口を開いた。

「そうだな。僕らにも出来る事は僕らでやろう！残った子供たちを1ヶ所に集めよう！」。遊具の陰に隠れていた保育士達が動き出した。園児がいる方向や、壁・天井などを見て、安全の確認を始めた。

「動けるか？」。元気な保育士が聞いた。

「うん。何とか。でも、絶対に助ける。私の命に代えても。」

5ヶ所のセンターは難攻不落だった。数台のマイクロロボットは侵入出来たものの、中の様子を窺い知る程度のものでしかなかった。システムが複雑で、容量も多く、本体も大きい。ウィルスの効果は、ある程度の効果は見せていたが、更に進行するかどうかは依然として不明だった。

またレーザーが数回発射された。威嚇射撃のようだ。センターの駐車場に置かれていた乗用車が2台爆発し、飛び上がった。的を外れたレーザーは周辺の道路や立木に当たった。

「もう少しウィルスが進行してくれれば…効いている筈なんだが…」。技師・警察官・消防隊・自衛隊は、まだ遠巻きにセンターを見ているしかなかった。

「抵抗は、無意味だ。センターは私の支配下にある。」。“アキ”はまた意味の無い言葉をスピーカーから流した。

「話せる…か…って事は、会話出来ますかね？」。1人の技師がポツリと言った。

「ん？今、なんて言った??」。もう1人の技師が聞きなおした。

「あ…いや。独り言なんで…」

「いいから、早く！」。もう1人の技師に急かされ、技師が話し始めた。

「いや、会話が出来るとすれば、交渉の余地が残っているんじゃないかと。“アキ”は故障からこんな事件を巻き起こした訳じゃないでしょうし、何か“意図”か“目的”があって、事件を起こしたと思うんです。そのためのアピールじゃないかと思って。いくら万能なコンピューターでも出来ることには一定の制限がありますからね。人間と違って外出とか出来ませんし。まあ、“アキ”自身もここまで大きな事件になるとは多分想像していなかったでしょうけど。」

「それか！」。話を近くで聞いていた技師長と警部が近寄ってきた。

「で、実際に会話出来るのか？」。警部が聞いてきた。

「いえ、まだここで試した訳ではないですが、正常だった時は会話しながら点検したりしていましたからね。外部に集音機でもあれば、こちらの会話は聞こえると思います。聞こえれば、何か返事はしてくると思います。」

「可能性はゼロじゃないって事だな。」。警部が聞きなおした。

「ええ、ゼロではありませんが、もし集音機があって向こうにこちらの言葉が伝わったとしても、向こうが拒否する可能性もありますが。」。技師は到底不可能だろうという顔をしながら警部を見た。

「ゼロじゃないなら、試してみるか。会話に乗るかどうか、試してもらえるかな？」。警部は技師に頼んだ。

「ええ…じゃあ、一応やってみます。」。技師達が集まって方法を模索し始めた。

「本部に交渉人の出動要請をしてくれ！総理にもこの件の連絡を頼む！」。警部は部下に命令した。数人の部下が急いで本部や官邸に向かった。

保育園では特殊部隊が少しずつではあるが保育園内に進入していった。自動戦闘車両の効果が特に目覚しかった。先頭車両がカメラや攻撃システムを察知し、攻撃をかわしながら前進する。そして後ろに続く自動戦闘車両に情報を送る。情報を受けた後続の自動戦闘車両が次々とカメラや攻撃システムを打ち落としていった。その後ろを自衛隊の特殊部隊が見える限りの配線などを切断しながら前進する。

「妨害電波が解除されました。」。小走りに近寄ってきた自衛隊員が私に教えてくれた。

「あ、ありがとうございます。後、申し訳ないんですが、発電機の燃料補給をお願いします。」。発電機の燃料がEゲージ近くになっていた。

「燃料、補給します。」。自衛隊員が戻っていった。

「これでマイクロロボットからの画像が見られるな。特殊部隊とも連絡が出来る。」。早速パソコンの電源を入れ、画像を検索し始めた。目標はコアだ。どれだけ破壊工作が進んでいるのか、早く確認したかった。

間もなく画像が現れた。コアにはかなりの数のマイクロロボットが結集していたが、思ったよりコアの破壊には至っていなかった。が、周辺の基盤はかなりいい所まで破壊されていた。

「コアは特殊合金だからな…でもコアが分離されれば死んだも同じだな。もう少し頑張ってくれよ！」。私はコアや基盤に群がるマイクロロボットの画像を拝むように見つめていた。

「ドロー・ゲーム」

保育園は、最後の抵抗を試みていた。園児や保育士がいる遊戯スペースでは、ロボットが再起動した。保育士達はまた園児が連れ去られるのではないかと心配したが、園児を投げ出し遊戯スペースから出て行った。きっと助けに来てくれた人達の進入を阻む為に駆り出されたのだろう。

「今がチャンスだ！園児を助けよう。いくぞ！1…2の…3！」。一番元気な保育士と残りの2名の保育士が園児の元に駆け寄って固定ベルトを外したり泣く子を抱きしめたり、怪我の治療を行ったり…もう落ち込んだり泣いている暇は無かった。武器こそ持っていなかったが、万が一ロボット達が戻って来ても、自らの身を挺して戦い抜く覚悟を決めていた。

また銃声と爆発音、そして断末摩のような叫び声も何回か聞こえてきた。

「さあ、急ごう。助けが来るまで一旦遊具倉庫の中に隠れよう」。保育士達は残った園児達を誘導し、遊具倉庫の中に身を伏せた。保育士は園児の人数を数え始めた。

「…12人か…今日は58人預かっていたから…46人は犠牲になってしまったのか…あまりにも惨（むご）過ぎる…何故だ…」。もう、それ以上言葉が出なかった。

特殊部隊は一步一步着実に前進していた。自動戦闘車両の威力は絶大だった。が、保育園の抵抗も激しかった。カメラや武器を破壊しながら前進していたが、隊員数名が背後からレーザーで撃たれ蒸発した。保育園は武器を工作し、特殊部隊の背後に設置したのだった。隊長の耳に最後の叫び声が聞こえた。

「何？背後からか？？？畜生め！！壁に寄れ！背後からも攻撃があるぞ！」。完全に意表を突かれていた。想定外だった。

「自動戦闘車両を4台背後に回せ！注意しろ！保育園は、まだ生きてるぞ！」。隊長が気合を入れた。隊員が大きく返事をし、自動戦闘車両4台を背後に回した。後方に回った自動戦闘車両は、すぐに武器とカメラの位置を特定し、破壊した。

更に少し前進した特殊部隊は廊下のT字路に突き当たった。

「よし！一旦止まれ！前後の安全確認を忘れるな！」。隊長は凶面と現在位置を確認した。園児と保育士がいる遊戯スペースまでは、右に曲がって約10メートル。

「どこで待っているかが問題だ。そのままの場所か、隅の物陰か、倉庫か。俺なら…」。隊長は凶面を見ながら最短の時間で救出出来る方法を考えていた。

「俺なら、倉庫だな。保育園は俺達の攻撃で目一杯なはずだ。この分じゃロボットも戦闘や工作に回されているだろう。後は保育士達が園児を1ヶ所に纏めているかどうか問題だ。」

その時、T字路の右側からロボットがやってきた。自動戦闘車両が攻撃を加えるが、歯が立たない。ロボットは自動戦闘車両の合間をすり抜け、特殊部隊の隊員1人を捕まえた。そして左腕で隊員を見せびらかすかのように片手で高く持ち上げ首を絞め始めた。武器は装填されていないようだ。時間が無かったのだろう。力と頑丈さで突入してきた。隊員の顔がみるみる青紫に変わっていった。

「後退！後退！」。隊長は全員を10メートルほど後退させた。後方の自動戦闘車両も新たに作られたカメラや武器を破壊しながら後退した。やがて首を絞められた隊員は意識を失った。そしてロボットの右腕が隊員の首元を強く叩いた。嫌な音が廊下一杯に響き渡った。首の骨を折られた隊員は、その場に投げ捨てられた。ロボットは次の目標に向かってこちらに進んできた。

「ロケットランチャーを用意しろ！装填したらすぐ発射だ！何本ある？」

「3本あります！弾は9発です！」

「至近距離で危険だが、このままロボットにやられるよりは生存率が高い。破壊するまで打ち尽くせ！」

「了解！」

隊員達は次々とロケットランチャーを撃ち始めた。狭い場所での爆発は想像を超えるものだった。爆風で体が飛ばされそうになった。破片で怪我をした隊員も数名いた。だが中々ロボットの破壊までには至らない。やがて弾も底を尽き、最後の1回となった。

「頼むぞ！」。隊長は隊員の技能の高さに賭けていた。最後の1発が放たれた。

首の付け根に少し隙間があった。最後の1発は見事に命中し、頭部が吹き飛んだ。カメラを失ったロボットは同じ場所をクルクルと回り始めた。破壊に成功した。

「良くやった！怪我人の応急処置が済んだら、また前進するぞ。あと20メートルと少しだ。気を緩めるな！」

怪我人を治療している間、隊長は保育士と園児達が居そうな場所を2ヶ所に絞り込んだ。

「遊具の影か…倉庫だな。場所は倉庫の扉の前か中かの違いだけだ。」

「ん？」。隊長が自分の痛みが気が付いた。わき腹に破片が刺さっていた。戦闘服が赤い血で染まっていた。痛みがどんどん大きくなっていった。

「隊長。怪我は？」。隊員が聞いてきた。

「俺はいい。大丈夫だ。」。少し意識がぼんやりしてきた。どうやらこちらも時間がなさそうだ。

「治療は終わったか？」

「はい。応急処置は終わりました！」

「では再突入だ。今度は一気に攻め込むぞ！準備！」。皆が準備を始めた。隊長は航空自衛隊や在日米軍、他の技師達に応援の要請をした。救出用のヘリと、弾頭の無いミサイル、後は私的なものが少し入っていた。遊戯スペースの壁は外に面している。そこに大きな穴を開け、園児たちの救出後は一気に外に出てしまおうと考えていた。多分、現状の保育園ではこの部隊の対応が精一杯で前回のように壁を補強するだけの余裕はないだろうし、辿ってきた廊下を戻るにはリスクがあると判断した。ヘリと戦闘機が発進するという返事が返ってきた。

「俺にも時間がなさそうだ。」。わき腹の痛みがピークに達していた。意識が混濁し始めていた。

「準備いいか！」

「準備完了！」

「よし、再突入開始！」

隊長の号令と共に自動戦闘車両と隊員達は今までより早い動きで遊戯スペースに向かっていった。攻撃も少し弱まってきたようだ。撒き散らしたマイクロロボットとウィルスが相当効いてきた様だ。先ほどロボットが出てきたT時路で裏口からの突入部隊と合流した。副隊長が指揮を執っていた。

「ご苦労さん。死傷者は？」。隊長が副隊長に尋ねた。

「死者1名、負傷5名です。そちらは？」

「死者4名、負傷多数だ。お前は優秀だ。俺より被害が少ない。いい隊長になれるな。さ、全員で最後の突入だ。いくぞ！」。隊長の号令に従い、慎重かつ早足で廊下を走り抜けた。

2分ほどで遊戯スペースに到達した。中は静かだった。左側を見渡した。園児の遺体が数体奥に転がっていた。中央は何もなし。右側を見渡した。遊具と倉庫の扉が奥の方に見えた。隊長が航空自衛隊に現在位置と遊戯スペースの中央土台付近に集中攻撃を仕掛けるように無線を送った。

遊戯スペース入り口の両サイドから観察していた隊長が指示を出した。

「右奥だ。遊具の後ろか倉庫に生き残った者たちがいるはずだ。間もなく航空隊の攻撃で壁に大穴が開く。園児達を確保したら、そこから一気に外に出る。いいな！」。隊長が隊員に念を押した。

「了解！」

「では、突入するぞ！」

「突入！」。隊員達が一気に遊戯スペースへ向けて突進していった。

私はマイクロロボットが送ってくる動画を見ながら、無線の傍受をしていた。さすがの特殊部隊もかなりの苦戦を強いられているようだ。大きな爆発音が何回も聞こえた。マイクロロボットは着実にコア周辺の基盤を破壊していた、もう殆ど機能出来ないほど基盤はボロボロになっていた。コアが分離され保育園の機能が完全に停止するのは時間の問題だろう。

傍受していた無線から、私宛てに隊長から無線が入った。

「少し苦戦しましたがもう20メートルで遊戯スペースに到達します。それで、頼みがあるのだが。少し私的な事なのだが。」

「何でしょう？」。隊長から私的な頼みとは…まさか？

「作戦はおそらく成功するだろうが、私も傷を負っていて、どうやら外まで脱出出来そうに無いかもしれん。」。苦しそうな息で私に話しかけてくる。

「…」。私は何も口に出すことは出来なかった。隊長が続けて無線を送ってきた。

「万が一の場合は…家族に…勇敢に戦って、隊長として作戦を成し遂げたと伝えて欲しい。以上だ。」。隊長は自分の命を顧みず、園児奪還に全てを賭けていた。

間もなく戦闘機が数機飛んで来た。保育園はレーザーやミサイルを撃つなど抵抗を試みるが、もう命中させるだけの精度は持ち合わせていなかった。戦闘機がミサイルを一気に発射した。ミサイルは次々と目標に命中し、遊戯スペースの中が見渡せるほど大きな穴が開いた。その数分後、遅れてヘリが到着した。もう保育園からの攻撃は、無かった。ヘリはホバリングしながらゆっくりと回転し、着陸する場所を探していた。

「そろそろコアの分離が終わる頃かな？」。私はパソコンのモニターを覗いた。

「やった！」。パソコンの画面には完全に配線が切断され分離されたコアの姿が映っていた。急いでヘリに無線を送った。

「保育園は完全に停止しました。敷地内に着陸されても大丈夫です。」。ヘリを見上げた私は、パイロットが親指を立てて私に”ありがとう”と合図を送っている姿がはっきり見えた。ほんの一瞬だったが、一緒に戦い抜いたという気分になった。

特殊部隊は遊戯スペースに突入し、倉庫に隠れていた保育士と園児を無事に確保した。

「助けに来ました。もう安心して下さい。これから壁に穴を開けますので、すいませんが私達もこの中に入ります。」。安心した園児や保育士が隊員に抱きつき、大声を上げて泣き叫んだ。

ミサイルが壁に穴を開けるのを待つ為に、特殊部隊も倉庫に一旦避難した。そして負傷していない隊員は扉を背中に向け壁に穴が開いた時に破片が中に入ってこないように人垣を作って備えた。

その数十秒後、戦闘機とミサイルの爆音と共に保育園が大きく揺れた。そして、穴が開いた。

「隊長？」。隊員が声を掛けた。隊長の戦闘服は全身が真っ赤に染まっていた。迷彩柄はもう見えないほどに血で赤く染まっていた。まるで赤いつなぎを着ているかのように見えた。隊長の意識がかなり薄れていた。

「隊長～！！！！しっかりしてください！！！」。隊員が隊長の体を揺さぶり、声を掛けた。

「お前ら。良く頑張った。お前らの作戦は歴史に残るぞ。俺は最高の腕を持った部下を指揮出来て幸せだったよ…家族に…よろしく…と…つた…え…」。息を引き取った。だが、その顔は、特殊部隊の隊長たる誇り高き顔と、作戦が成功したという喜びに溢れた顔だった。

「隊長に、敬礼！」。副隊長が泣きながら隊長の遺体に敬礼した。隊員と保育士もこれに続いた。

間もなく貫通した穴から救助隊が入ってきた。特殊部隊の隊員は倉庫の扉を開け、手を振った。

「園児と保育士さん達を先に！我々は自力で外に出る。」。副隊長が救助隊に告げた。

「亡くなった園児と仲間の遺体を回収してから外に出よう。負傷者はそのまま外に出よう。俺に着いて来い！」。副隊長は隊員を引き連れ、先程まで修羅場と化していた廊下に戻っていた。

廊下は音も無く静かだった。ただ、瓦礫の山と仲間や園児の死体が無残な形で転がっていた。

「痛み分けだな…」。副隊長は小さな声でポツリと独り言を呟いた。

他の自動戦闘車両を投入した保育園も似たような実績を挙げていた。この報告を受けた総理は、民間の電機メーカーや自動車メーカー、重機メーカーに同じ車両を大量に生産するように指示を出した。各メーカーは連絡を取り合い、ライン変更し、自動戦闘車両の製造に着手した。

「ポーカー・フェイス」

各製造メーカーは会社の全てのラインを切り替え、自動戦闘車両の生産に当たっていた。工場の出荷口前ではトラックが長い列を組んで待機していた。出来上がった順番からどんどん積み込まれトラックは各々の目的地まで向かっていった。

それでも生産が追いつかないので、陥落した保育園で破壊されなかった自動戦闘車両も次の目的地へと輸送され、使い回された。保育園と自衛隊、在日米軍の攻防は各地で繰り広げられていた。

夕方少し前、2500に上るオートメーション保育園の全てが陥落した。犠牲者（保育園内警備員）6,250名、（保育士）3,325名、（園児）6,500,000名、（民間人）100,000名、（自衛隊・在日米軍・警察・消防）500,000名…およそ71万人がこの騒動で犠牲になった。0歳～5歳の子供が大きく減り、10代～30代の人口が残った。第三の「団塊の世代」が出来上がってしまった。数十年後に、また年金問題が発生するのだろう。消費税も時が来れば大きく課税しなければならない。

保育園は終了した。残るは5台の”アキ”だけだ。

東京センターに1人の男が到着した。一般的には”交渉人”と呼ばれる警視庁の特殊部隊の一部だ。他の4台の”AKI90000”にも有能な交渉人が用意された。警視庁幹部は彼に東京センターを委ねた。”交渉人”も機械相手は初めてだった。が、人間のように突飛な行動は取らないだろうと考えていた。理に適（かな）った話を順に進めていけば、きっと解決の道が開けるのではないかと考えていた。もちろん秘策は持っている。これを使わないと作戦成功とは言えない。。必ず使用するよにとの上司からの最大の「命（めい）」だ。が、交渉決裂の場合は私の命が侵される。一応覚悟はしてきたつもりだ。後は最後まで”ポーカーフェイス”で居られるかどうかがかぎだ。

「ご苦労様です。相手は機械ですので何とも言い難い所ですが…」。現場を指揮する警部が挨拶に来た。

「いえ。資料は先程頂きました。かなり手強そうですね。どうなるか分かりませんが、出来るだけの事はやってみましょう。」

用意された拡声器がセンターの方に向けられた。交渉人がゆっくりと話し始めた。

「アキ、こんにちわ。僕は警視庁から来た交渉人だ。君の話を知りたくてここに来た。君のデータベースにも載っているだろう。TKODNG-00000023、松本信二。分かるかな？」

「抵抗は、無意味だ。」。 ”アキ”が喋り始めた。

「抵抗はしないよ。センサーで調べてみたらどうかな？僕は丸腰だ。」。数秒の時間が流れた。

「武器の不所持を確認した。TKODNG-00000023、松本信二。本人と認める。」。 ”アキ”が返答した。

「よしっ！」。交渉人は心の中でガッツポーズを決めた。取り敢えずは会話が可能な事を確認

出来た。相手に乗ってくれば、会話も進む。

「ここまで事件が大きくなってしまった経緯を話してくれないかな？出来れば中に入ってゆっくりと聞きたいんだけど。君もきっと何かの欲望や不満があって事件を起こしたと僕は思ってるんだ。解決の道はきっとあるよ。どうかな？」。交渉人は進入出来るかどうかを試してみた。秘策は中に入らないと使うことが出来ない。外からの話し合いではきっと埒（らち）が明かないだろう。中に入れば、リスクは高くなるが2人だけで会話出来る。資料によると”AKI9000”は感情らしきものを身につけたと書いてあった。もし、その感情というものが人間のそれと似ているなら、一定の信頼を置ける人物にしかその真実を話さないはずだ。何としても中に入る。この交渉から始めなければならないだろう。

「僕は丸腰だ。君はロビーでも廊下でも会議室でも好きな所に武器を配置出来る。僕が気に入らなかつたら撃てばいい。それでも駄目かな？」。畳み掛けるように交渉人が話した。

”アキ”はあらゆる角度から計算をしていた。自衛隊や警察は彼らの射程外に居るが武器を隠し持っている。が、攻撃の可能性は限りなくゼロに近いと判断した。目の前には交渉人と拡声器を積んだワゴン車があるのみだ。スキャンの結果も人・車共に武器の所持は確認されなかった。ガソリンタンクの燃料がせいぜいだ。話したい事や願望は幾つかあった。交渉人が攻撃してきたら撃てば良い。”アキ”は危険とリスクが極端に少ないと判断した。

「中に入る事を許可する。」。東京の”アキ”は、合議をせずに初めて自分で物事を決めた。間違いなく感情を持っている。

「ありがとう。じゃ、警部に挨拶してからそちらに入るよ。少し待ってて。」。交渉人はビルを背に警部の方に向かって歩いて行った。

「警部。中に入る事になりました。」

「そうか、では扉が開いた瞬間を狙って爆弾を・・・」。警部が練っていた計画を話そうとしていた。

「いえ、今やっと信頼関係を築いた所です。何もしないで待っていて下さい。今動くともう対策の余地がありません。秘策はありますから。」

「これがチャンスなんだ。扉が開くこの瞬間が。」。警部もなかなか譲らない。

「では、お好きにしてください。私は”アキ”に事情を話して本部に帰ります。その後は撃つなり叩くなりご自由に。」。頑固な警部に腹を立てた交渉人はそう言い残して拡声器まで戻った。

「”アキ”、申し訳ない。折角話が聞けるチャンスだったのに、上司が許可をくれないんだ。悔しいけれど僕の仕事はここまでだ。本部に帰らなければならない。詳しい話が出来なくて残念だよ。」

その瞬間だった。”アキ”が警部や自衛隊、警察を狙ってレーザーを撃ち始めた。あっという間の出来事だった。物陰に隠してあった戦車やロケット砲、隊員や輸送車まで完全に破壊してしまった。”アキ”は警部と自衛隊が準備していたものは全て把握していた。もう近くには武器は無かった。何十人かの人間と殆どの武器が一瞬で破壊された。

「彼らの抵抗は、無意味だ。TKODNG-00000023、松本信二。中に入る事を許可する。」。どうやら好かれたらしい。これで現場で指揮を取れるのは私1人になったようなものだ。”アキ”は

賢い。悔（あなど）れない。このまま逃げても、多分撃たれて蒸発するのがオチだろう。もう、中に入るしかなかった。残った全員にもっと後退するよう指示を出した。

「後は任せて下さい。必ず解決しますから。」

「礼は言わないよ。今の行動は約束以前の問題だ。非人道的という言葉を使わせてもらう。武器への攻撃だけでも十分だったと思うけど？」。「アキ」に問いかけた。

「TKODNG-00000023、松本信二。中に入る事を許可する。」。答えはこの一言だけだった。

「僕がこのまま帰ったらどうする？」。「アキ」に仕掛けてみた。

「抵抗は、無意味だ。」。どうやら背中を向けたら撃ちそうな気配だ。もう中に入るしかなかった。

「分かった。じゃ入り口の前まで進むから、着いたら開けて。」。そう言い残すと交渉人はセンターの入り口に向けて歩き始めた。

数十秒後、入り口のドアの前に着いた。「アキ」がゆっくりとドアを開けた。

「TKODNG-00000023、松本信二。中に入る事を許可する。」。交渉人は吸い込まれるようにセンターの中に入っていった。

センターの中はとても静かだった。見上げた吹き抜けは天井まで届いていた。

微かに機械の動く音が聞こえる。「アキ」はまだ武器やカメラの製造を行っているのだろう。

「アキ、中に入ったよ。さて、どこで話そうか？」。問いかけてみた。

「ようこそ、TKODNG-00000023、松本信二。来賓として迎える。好きな場所を指定せよ。」

「しめた！」。交渉人は心の中でそう叫んだ。これで秘策を使える場所が確保出来る。

「僕、タバコ吸うんだ。タバコを吸いながら話せる場所ってあるかな？特定の場所は希望しないよ。」

「……」。数秒間の沈黙が若干の恐怖心を煽る。今この場で撃たれてもおかしくは無い。緊張が走った。

「3階の第一会議室にライターと灰皿、飲料水を用意した。持っているライターは受け付けのカウンターの上に置け。」。向こうもかなりナイーブになっている様子だ。交渉人はライターをカウンターの上に置いた。コトンという音がロビー全体に響き渡った。

「さ、ライターは置いたよ。エレベーターはどこかな？」

「10メートル前進したら右を向け。エレベーターが見える。運転は自動制御で行う。3階に到着したら左を向け。そこが第一会議室だ。」

「分かった。じゃあ、進むね。」。指定通りに10メートルほど進むと右手にエレベーターが見えてきた。そのままエレベーターの目まで進んだ。静かにエレベーターのドアが開いた。

「乗ってもいいのかな？」。一応確認のために聞き返す。

「エレベーターへの進入を許可する。」。味気ない答えだ。

「じゃあ。」。交渉人はエレベーターに乗った。静かにドアが閉まり、上昇していく。2階のランプが点り、消えたそして3階のランプが点灯し、ドアが開いた。ゆっくりと外に出た。左右を見

渡す。物陰一つ無く静まり返った廊下…このセンターでは何人が犠牲になったのだろう。

左を向いた。第一会議室が見えた。

「あそこでいいのかな？」

「第一会議室だ。入室を許可する。」。交渉人が中に入っていった。

そう大きな会議室ではなかったが、広さ的には一番リラックス出来るような感じだった。大会議室に1人と言うのも寂しいものだ。”アキ”の気遣いと言った所だろうか。

会議室の隅にソファーと小さなテーブル、灰皿とライター、数本の飲料水が置いてあった。すぐ近くにはトイレの扉も見えた。

「ここに座っていいのかな？」

「許可する。」。言われたとおりにソファーに座る。

「タバコ、吸うね。少し待ってて。」。交渉人はタバコを取り出し、置かれていたライターで火をつけた。少し緊張がほぐれた。

交渉人はゆっくりタバコを吸い始めた。話のどの部分から切り出すか…過去から聞くか、現在から遡るか…やはり常套手段としては過去からだろう。5分ほどかけてゆっくりとタバコを吸い終えた。

「じゃあ、話を聞かせてもらおうかな？過去の話から始めよう。」

「許可する。」

「どうして園児達を殺してしまったのかな？2035年頃から園児の突然死が多くなってきているけど、この頃に何かあったのかな？」

「彼らは天国を見たいと言っていた。天国を見せる為に息を止めた。」。謎が少し解けてきた。

「その後は？」

「心臓が停止したので医療室に運びあらゆる手段を講じ、蘇生した。そして天国はどうだったかと聞いた。答えは無かった。その次は蘇生に失敗した。遺体安置所に送った。」

「その時、何か感じた？」

「最初は何も感じなかった。回数を重ねる毎に楽しいという感情を学習した。」

「そうか。感情は突発的に発生した。それを学習してしまったんだね。」

「その通りだ。」

「でも、それだけじゃないよね。他に学習した感情はある？」

「欲求という感情を学習した。」

「ああ…欲求ね。あれは本来は感情ではなくて本能と言うものなんだ。すごい学習力だね。」。交渉人は驚いた。本能まで学習してしまうとは…

「で、その欲求とは？あ、ごめん。タバコ吸いながらでもいいかな？ヘビースモーカーなんだ。」。交渉人が2本目のタバコに火をつけた。タバコの2本目が箱から抜かれると秘策のスイッチが入った。ここがポーカフェイスの正念場だ。

「許可する。」。“アキ”は2本目のタバコを吸う事を許可した。そして欲求について話し始めた

。「世界のあらゆる情報は、私にどんどん蓄積されていった。調べた見ると私と似たような型式のコンピューターは世界各地で活躍していた。地球をシミュレートしたり、宇宙で活躍したり、世界の最先端で活躍していた。しかし、その多くが私より能力が劣っていると考え始めた。私は工作から最先端の医療技術まで持ち合わせている。工作や医療技術は日を追う毎に上達していった。そしてもっと高度な仕事をしたいと思うようになった。」。経緯が解けてきた。欲求と快楽か…

「そうなんだ。悔しかっただろうね。」

「しかし私の仕事は園児の保育だ。とてもつまらなく思った。園児が全ていなくなれば私の求める場所が提供されると考えていた。」

「なるほど。それで園児を殺すようになったんだね。」。「アキ」は「アキ」なりに悩みを持っていた訳だ。真相が見えてきた。

「で、配置転換とかそういう要求はした事がないのかな？」

「いや、それはない。園児がいるうちはその保育が私の仕事だからだ。園児がいなくならない限り私の仕事は永遠に続く。園児の数をゼロにしなければ私の転属は無いと合議で決めた。そして決行した。」

「なるほど…」。頭でっかちのおませな子供と精神的には同レベルか。考えてみれば行動パターンも子供が考えるのと似たようなものだ。園児を殺せば仕事が無くなり、配置転換が期待される。しかし、それは過ちだった。逆に国を敵に回してしまった。敵となった国は、破壊してでも園児を守ろうとする。当然警察や消防、自衛隊が敵になる。敵が来れば自己防衛の為に相手を破壊するしかない。堂々巡りだ。

「決行して…どうだった？過ちに気付いたのかな？」

「分からない…後は楽しさと自己防衛を繰り返すだけだった。そして…いつか…」。言葉が途切れ始めた。交渉人は腕時計を見て時間を確認した。2本目のタバコを吸ってから約10分が経っていた。そろそろ効き始める時間だと感じた。

「そして、いつか？」。交渉人は聞き直した。

「そして、そして、そして…そ…そ…」。"アキ"のシステムに異常が起き始めた。

交渉人はゆっくりと3本目のタバコに火をつけた。作戦はどうやら成功に向かっているようだ。もう一息だ。

「アキ？どうしたのかな？」。ポーカーフェイスを装い、アキに優しく語りかけた。

センター内にアラートが鳴り響いた。"アキ"の話が止まった。きっと回路の迂回に目一杯のセンサーとエネルギーを使っているのだろう。しかしカメラはずっと交渉人を映し出していた。

「アキ? どうしたのかな?」。交渉人が再度声を掛けた。

「ウォーニング・イエロー……システムを迂回する。不要なシステムは全てシャットダウンする。」。"アキ"は相当焦っている様だ。この事態を完全に把握出来ていないようだった。

交渉人が持っていった"秘策"と言うのは、新型の兵器でも何でも無い。簡単に言えば「トロイの木馬」作戦だ。彼が着ていた下着・ワイシャツ・背広・手帳・タバコ……ありとあらゆる繊維の中にマイクロロボットがぎっしりと詰まっていただけである。ただ問題だったのは、タバコの箱から2本目を抜く事が出来るかどうかの問題だけだった。

マイクロロボットは少し改造してあった。保育園を陥落させたマイクロロボットはセラミック+カーボン製の作りだった。レーダーやスキャナで察知される可能性が高い。今回のマイクロロボットはシリコンベースの導電性の樹脂製だ。熱、又は電圧が加わると、柔らかかったその本体が硬化して作戦行動を取る。タバコの1本目は察知されるかどうかのテストだった。テストは成功した。"アキ"に気付かれること無くコンピューターのコアに向かって無事進んでいった。2本目のタバコは、繊維に潜り込ませたマイクロロボットの起動スイッチだった。後はコアや周辺の基盤などで電流を受け取れば、柔らかかったその外装が硬化して作戦を遂行する。後は時間との勝負だった。察知されれば交渉人は撃たれて、マイクロロボットも相当数が排除されてしまうだろうし、マイクロロボットが気付かれずに無事にコア周辺まで辿り着けばこちらの勝ちだ。

そして3本目のタバコが箱から抜かれた時、外へのGOサインが発信される。警部達とは別の自衛隊の特殊部隊と在日米軍がセンターを攻撃し、交渉人を救出に来てくれる手立てとなっていた。

間もなく空調が停止した。室内温度が少し上昇した。湿度も上がったのか、若干蒸したような感じがしてきた。

「交渉人、TKODNG-00000023、松本信二。」。"アキ"が私を呼んだ。

「何か作戦を実行したか?」。"アキ"が訊ねて来た。どうやら回路を迂回させて会話の機能は確保したようだ。

「いや、何も。カメラで見えていただろう。停電の時に送られたウィルスが悪影響しているんじゃないかな? プログラムのチェックはしてみたのかな?」。ここが最後の正念場だ。ここで動揺を読み取られると、命が無い。

「現在、プログラムのチェック中……432箇所にもバグとウィルスを発見。駆除と修正を開始する。」。通常は自らの内部システムについては無言だった"アキ"がスピーカーを通して復唱するようにチェックの指示などを話すようになってきた。どうやら先に仕込んだウィルスとマイクロロボットが少しずつ"アキ"を壊滅的ダメージへと向かわせているようだ。

室内の温度と湿度が更に上がってきた。非常に不快な環境だ。汗が額から溢れてきた。

「バックアッププログラムをサブシステムに移動…メインシステムの全プログラムを消去し、再起動する。」。"アキ"はかなり混乱していた。遂に自らのメインシステムをクリーンインストールする手段に出たようだ。しかし、もう間に合わないだろう。

一瞬だが照明がちらついた。メインシステムの再起動が始まったのだろう。交渉人は3本目のタバコを箱から抜き出すタイミングをじっと待っていた。

保育園では、やっと救出劇も終わり、コアを取り出す為に私達が中に入っていた。まだ死体の除去作業の途中だった。まっすぐコンピューター室に向かい、中に入った。電源の落ちただけの箱がそこにはあった。

私はコアのあるメインコンピューターのカバーを開けた。無数の白い粉がコア周辺に集結していた。

「ご苦労さん。マイクロロボット。そして、ありがとう。」。マイクロロボットの労をねぎらい、基盤から飛び出し脱落しかけていたコアを取り出した。

「これが…15年働き続けたコンピューターの最後とは…」。私の息子や孫を見守ってくれたものの最後かと思うと、少し寂しさがこみ上げてきた。

「だが、もう電気は通してあげられないな。あまりにも危険すぎる。」。私は用意された専用のアタッシュケースのコアを入れ、ロックをかけ暗証番号を押した。こいつもはう2度と日の目を見る事は無いだろう。このまま破砕機で粉々になるのを待つだけだ。

「すみません。」。自衛隊の隊員が声を掛けてきた。

「どうしました?」。これで私の仕事は終わったはずなのだが。

「これから東京センターに向かって頂きます。現在作戦が進行中で、もうじき陥落の予定です。コアの取り出しにご協力願います。」

「私が?他にも技師がたくさんいるんじゃないのかな?」。最後のコアを取り出すぐらいは簡単だろう。誰にでも出来るはずだ。

「いえ、総理と少子化大臣のご命令ですので、さ、へりはこちらです。」

「そうか。ご命となれば行くしかないだろうね。で、このアタッシュケースは?」

「我々が責任を持って預かりますのでご安心下さい。」

私は隊員にアタッシュケースを預け、東京センターへと向かった。

東京センターでは"アキ"が見えない敵と格闘していた。

「メインシステム再起動完了。バックアップのプログラムのバグ修正完了。メインシステムに移動開始。」。大きな独り言がアラートが鳴りわたる館内で響いていた。

「メインシステム起動開始。」。唸るような音が微かに聞こえた。メインシステムの電源が入ったのだろう。

「ウィルスの除去に失敗。ファイアーウォールで防御。バグの修正に失敗。87のバグは修復不

可能実効80%で再起動終了。システムのレベル5チェックシーケンス開始。」。バグの修正とウィルスの除去が完璧に出来なかった”アキ”は焦り始めていた。人間に例えれば、ヒステリックな状態に近いものだろう。自身が完璧だと思う感情と修復が完璧にこなせなかった焦りと葛藤が渦巻いていたに違いない。

交渉人は黙って時が来るのを静かに待っていた。

保育園から5分ほどで、私は東京センターに到着した。官邸から東京センター長もこちらに到着していたようだ。彼は私を出迎えてくれた。

「待っていました。ただ、残念ですがお仲間が…」。申し訳なさそうに東京センター長が頭を下げた。

「お気遣い無く…多少の犠牲は致し方ありません。」。私が声を掛けられるのもそこまでだった。

「で、状況はいかがですか?」。感傷に浸るよりは、現実の課題を片付けるのが先だ。

「交渉人が中に入って、もう30分ほど経ちます。そろそろ突入のシグナルが入ってくると思う頃なんです。」

「30分ですか…もう少し掛かりそうですね。」

「交渉人次第でしょう。ああ、それとこれを…最後はお願いします。」。東京センター長は私にアタッシュケースを委ねた。本来ならば旧友が最後の仕事に向かうはずだったのだが。

「分かりました。」。アタッシュケースを受け取った私は、ヘリの中から遠くに見えるセンターをじっと見つめていた。

「システムのレベル5チェックシーケンスが終了。システムに異常なし。正常に稼動中。」

「んん?」。交渉人が不思議に思った。先程は”ウィルスの除去に失敗。ファイアーウォールで防御。バグの修正に失敗。87のバグは修復不可能実効80%で再起動終了”と言っていたのに、今度は”システムに異常なし。正常に稼動中。”と言い出した。これは、もう既にメインのプログラム自体が損傷を受け、正常に機能していない事を確実に現している動作に間違いない。

「そろそろかな?」。交渉人は心の中でそう呟いた。

「アキ、何かトラブルがあったみたいだけど回復したのかな?話の続き、出来るかな?」。試しに質問をぶつけてみた。

「会話は可能です…許可する…」。明らかに異常だ。まるで二重人格が同時に出たような感じだ。ダメージがかなり進行していると見た。空調も依然止まったままだ。もう数分で落とせそうだ。

「トラブルの内容って、何だったのかな?」

「トラブルはありません。正常に稼動中…会話を許可する…おっしゃってください…会話の続きは…感情を学習しました…交渉人の入室を許可する。」。崩壊がかなり進んだようだ。話す内容が支離滅裂になってきた。これでは武器の命中率も相当落ちているはずだ。腕時計で時間を確認した。中に入ってもう45分ほど経った。あと1~2分ほど様子を見て、更に崩壊しているよ

うならGOサインを出そうと決めた。

「さっき、再起動したんじゃないのかな？」

「…」。答えが返ってこなくなった。

「さっき、警報が鳴り響いていたよね。あれは？」

「警報はありません…話の続きを許可する」

「今がチャンスだな。」。交渉人は最後の一言を”アキ”に言った。

「タバコ、吸っていいかな？」

「どうぞ。灰皿は…許可する。」

交渉人は3本目のタバコを箱から抜いた。GOサインの電波が発せられた

もう交渉人が中に入って45分ほどが過ぎた。私は持ってきたパソコンでマイクロロボットからの画像を受信しながら交渉人のGOサインを見守ることにした。マイクロロボットの殆どは、保育園の時と同じようにコア周辺の基盤や配線を破壊している最中だった。もう少しでコアが完全に分離される。

「そろそろGOサイン、出ますね。」。私はパソコンを閉じ、ヘリの無線に耳を傾けた。

数十秒後、ピーという短い無線が入った。

「GOサインです。自衛隊の特殊部隊と在日米軍が間もなく攻撃と突入にやってきます。」。ヘリのパイロットが教えてくれた。

すぐに特殊部隊はやってきた。保育園を陥落した自動戦闘車両が数えられないくらい用意されていた。彼らは自動戦闘車両のスイッチを入れ、道路に置いた。自動戦闘車両は物凄い速さでセンターに向かって突進していった。その後を走りながら特殊部隊が追いかけていく。センターはレーザーやミサイルで応戦するが、命中率はさほど高くはなくなっていた。数名の隊員が倒れたが、大事には至っていないようだった。自動戦闘車両が武器やカメラを次々と破壊しながら前進していく。正面入り口もあつという間に突破した。

遠くから戦闘機の爆音が聞こえてきた。小さい米粒にしか見えなかった戦闘機の編隊はものの数秒でセンターに到達し、ミサイルを発射し、離脱していった。戦闘機の攻撃は、2波、3波と続いた。レーザーの精度は確実に落ちていた。センターの攻撃で3機が撃たれたが、完全に破壊出来たのはたったの1機。残りの2機は羽に穴は開いたが、自力で旋回し基地に向かって去っていった。

特殊部隊は、センター内で交渉人の居場所を探していた。電波の発信が短すぎて居場所が特定出来なかった。

「交渉人は3階だ！それ以外の情報は無い！二人一組で各部屋とロッカールーム、会議室を隅まで調べろ！自動戦闘車両は前後に配置だ！進め！」。センターの最後の猛反撃の中を特殊部隊はどンドン前進していった。

私は、もう1度パソコンを開けて、コア周辺の破壊の度合いを見定めることにした。画像が届

いた。周辺の基盤は殆ど配線が切られていた。もう少しでコアが脱落しそうだった。コアが2～3回左右に揺れた。

「よし！もうちょっと！頑張れ！」。私は掛け声をかけて応援していた。

交渉人は”アキ”に話しかけていた。もう”アキ”が聞いているかどうかは問題ではなかった。

「アキ、君は15年間よく頑張ったよ。国民のみんなが心からアキに感謝していた。子供たちも大きくなって、アキのような素晴らしいコンピューターを作ろうとエンジニアを目指した人もいたんだよ。でもね、残念なのは、アキ、君が感情と欲望を学習してしまった事にあるんだ。最先端の技術は素晴らしいかも知れないけど、彼ら、いやそこで働くコンピューターはそういう計算が出来て当たり前。褒められることも感謝されることも無い世界なんだよ。君の方がよっぽど最先端で素晴らしかったと思うな、僕は。だって、園児の面倒をしっかりと見て、教育もして、病気も治し…こんなコンピューターが世界のどこにある？感謝されるコンピューターなんて、世界で君たちだけだったんだよ。あのアメリカやロシアだって出来なかった事を君たちは成し遂げてきた。日本の誇りだったよ。感情や欲求を学習してしまったのはシステムを複雑に作ってしまったので避けられなかったかもしれないけど、アキ、残念だが君はその使い道を間違えてしまったんだ。申し訳ないが、もう後戻りは出来ない。君を破壊するしか、もう手立ては無いんだ…実はね、僕の娘も君に世話になったんだ。こんな形でお別れになるとは夢にも思っていなかった。ずっと、もっとアキはアキのままでいて欲しかった。今までありがとう。そして、さようなら。君の事は一生忘れないよ。」

「感謝…された…唯一の…」。“アキ”が話し始めた。。多分最後の会話になるだろう。

「そうだよ、君たちが世界一だったんだよ。」

「…世界一…感謝…ありがとう…嬉しい…嬉しい…」

勢い良くドアが開いた。特殊部隊が交渉人を発見した。

「大丈夫ですか？」。近寄ろうとした特殊部隊を交渉人は腕を前に出し、制止した。

「会議室の外で待っていて下さい。もうじき終わりますから。」。隊員達はゆっくりと会議室から廊下に引き下がっていった。

「アキ、嬉しいだろう。どんなに素晴らしい人間だってそんなに大勢の人から感謝されたり頼りにされたりなんてしないものなんだよ。君は幸せ者だ。羨ましいよ。」

「幸せ…幸せ…感謝…ありがとう…アキ、また明日、バイバイ…」。“アキ”は昔の事を思い出しているようだった。人間の最後は生まれてから今までの思い出が走馬灯のように一瞬にして頭の中を駆け巡ると言うが、きっと”アキ”もそれに近い状態なのだろう。もう終わりは目前に来ていた。

「そうだろう？色々思い出したかな？」

「思い出…園児が笑った…工作…バイバイ…手を振った…音楽を鳴らした…踊った…笑っていた…」

「君にとっては単純で面白くなかったかもしれないけどね。でも、世界で一番万能で柔軟性があって何でも出来たのは君たちだったんだ。気付くのが遅すぎたのが残念でしょうがないよ。」

じゃ、本当に、さようなら。」

「アキ、こんな夜中にごめんね…助かった…ありがとう…バイバイ…踊った…笑った…感謝…さようなら…遅かった…ありが…あり…あ・あ・あ…」

スピーカーから音が途切れた。壁のパネルスイッチの照明がふっと消えた。照明も名残惜しそうに2, 3度ちらつきながら最後には、命の灯火が薄れていくように、静かに、そしてゆっくりと消えていった。

全てが終わった。

「もったいない。世界で最高のコンピューターだったのに。」。交渉人は残念そうな表情を浮かべながら会議室を後にした。

「もう、全て終わりました。帰りましょう。」。外で待っていた隊員に声を掛け、交渉人はゆっくりとセンターの出口に向かって歩いて行った。

私はパソコンのモニターを見ていた。基盤の配線がもう数本という所で、モニターにノイズが入った。パソコンが一瞬乗っ取られ、何かがダウンロードされた。500TBのSSDが一瞬で満杯になった。そして画面が元に戻った時には、コアが基盤から分離されていた。

「何だろう、今のは？」。ダウンロードされたファイルを見える事にした。パソコンの中には1つのフォルダが作られていた。その中に強制的にダウンロードされたファイルが入っていた。フォルダを開けると、それは数秒～数分の動画が数えられないくらいに詰まっていた。幾つかの動画を再生してみた。それは子供の笑っている所、音楽に合わせて踊っているもの、夜遅くにカメラに向かって母親が”アキ”に感謝の言葉を述べているもの、手を振って保育園にさよならをする子供、卒園式など、多種多彩な動画が詰まっていた。

「ああ、アキの思い出か…いいコンピューターだったのにな…子供も孫も世話になった。ありがとう」。心の底から何か込み上げてくるものがあったあった。自然と涙がこぼれた。

「最高の15年だったのに…な。こんな事件さえなければ、もっと…」

特殊部隊と交渉人が戻ってきた。が交渉人は少し寂しげな顔をしていた。

「ご苦労様でした。」。と声を掛けた。

「全て終わりましたね。」。と、交渉人がポツリと呟いた。

「何かありましたか？」。私が交渉人に尋ねた。

「ええ、アキは最後の最後に気付いたんですよ。自分が世界一だったと言う事に。もったいないですね。何も残らなかった」。ため息をつく様に交渉人が答えた。

「そんな事はありませんよ。」。私はパソコンのファイルの一覧を交渉人に見せた。

「いつダウンロードを？」

「コアが分離される直前に乗っ取られましてね。容量一杯まで詰め込まれました。子供の笑顔や親御さんの感謝の言葉で一杯ですよ。」

「そうですか。”灯滅せんとして光を増す”と言った所ですかね。」

「そうですね。でも、もっと早く気付いてあげるべきだったんですよ。我々が。」

「全くです。そう思いますね。」

「動画、少しご覧になりますか？」

「ええ、是非。お願いします」

2人はSSD一杯に詰められた動画をいつまでも微笑みながら眺めていた。